地質学雑誌　第125巻　第7号（通巻1486号）付録　令和元年7月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.22 No.7 July 2019

日本地質学会
第126（い〜ふろ）年学術大会
2019 山口大会

2019年 9月23日（月・祝）〜25日（水）

会場：山口大学　吉田キャンパス

事前参加登録　8月19日（月）18時 締切

（郵送の場合　8月9日（金）必着）

事前参加登録に関する注意点

- 参加登録に関わるお申込（参加，要旨集，巡検，懇親会，弁当）は，オンラインによる大会専用参加登録システム（**会員・非会員にかかわらずどなたでも申込可**）をご利用の上，お申し込み下さい．
- **講演申込をされた方も別途忘れずに大会参加登録をして下さい．**
- 参加費**有料の方には必ず要旨集1冊が付きます**．参加費無料の方（名誉・50年会員，学部学生など）は要旨集が付きませんので，ご希望に応じて別途購入して下さい．
- 巡検は，アウトリーチ巡検（A/Bコース）以外は，定員になり次第締切ります．**既に定員に達したコースもあります．参加希望の方はお早めにお申込下さい．**
- 申込締切後，確認書（ハガキ）を発送します（9月初旬発送予定）．大会開催10日前までには申込者の皆様のお手元に届くようお送り致します．締切時点で入金確認が取れない場合：請求金額は，「当日払い」の金額となり，未入金旨記載された確認書が送付されます．

お申込は，大会ホームページから

https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp126/top

日本地質学会*News*

Vol.22 No.7 July 2019

The Geological Society of Japan *News*
一般社団法人日本地質学会
〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル ６F
編集委員長　小宮　剛
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

一般社団法人日本地質学会2019年度総会記事……2
議事録／ 2018年度事業計画に照らした本年度実績概要／ 2018年度事業経過報告／ 2019年事業計画骨子／財務諸表／永年会員顕彰者／2019年度名誉会員推薦理由／ 2019年度各賞授賞理由

CALENDAR……22

ご案内……23
第22回日本水環境学会シンポジウム

公募……24
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設教員公募／京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻教授または准教授公募／岡山大学大学院自然科学研究科地球生命物質科学専攻教員公募／島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター特任助教公募／岩手大 理工学部教員公募／農林水産省経験者採用試験（係長級（技術））

各賞・研究助成……25
第60回東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦第28回（2019年度）／藤原ナチュラルヒストリー振興財団学術研究助成／第41回沖縄研究奨励賞推薦募集

報告……26
防災学術連携体総会　報告／「第2 回 防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会」参加報告／研究論文不正問題についての報告

紹介……27
地殻の隆起　　山はなぜ高いか　星野通平著（矢野孝雄）／基礎地質学ノート　佐野弘好著（尾上哲治）／球状コンクリ－ションの科学　吉田英一著（竹内　誠）

会員の声……30
赤石山荘の存続について（ウォリス サイモン・青矢睦月・水上知行）
意見・提言……31
東赤石山「赤石山荘」の存続について（要望書）

Island Arc日本語要旨（Vol. 28, Issue 4）……32

表紙紹介……33
長門峡の重塀岩～ 2019山口大会関連～（永山伸一・今岡照喜）

支部コーナー……34
関東支部：地質技術伝承講演会および2019年度関東支部総会報告

院生コーナー……34
日本古生物学会第168回例会　夜間小集会「博物館を学ぶ」参加報告（村上達郎・黒須弘美・髙津翔平）

追悼……36
名誉会員　武田裕幸さんを偲ぶ（今村遼平・大森正一）

事務局営業カレンダー　お休み

7月 July

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8月 August

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

印刷・製本：日本印刷株式会社　東京都豊島区東池袋4－41－24

一般社団法人日本地質学会2019年度総会

一般社団法人日本地質学会 2019年度総会議事録

以下のとおり，2019年度定時社員総会を開催した．

日時　2019年5月25日（土）14：00～15：45
会場　北とぴあ　第1研修室（東京都北区王子1-11-1）

・総会開催にあたり本日出席の代議員から，議長として内藤一樹氏を，副議長として芦寿一郎氏を選出した．
・議長は審議開始に際し，本日出席の代議員から書記として橋本善孝氏ならびに福地龍郎氏を，また，議事録署名人として同二人を指名した．
・議長は，本日の出席者数を確認し，総会定足数である代議員の過半数50名をこえる出席者があるので成立している旨宣言し，議事に入った．

代議員（＝社員）総数　99名
議決権総数　99個
出席者数　87名（委任状1号33，2号～4号34，議決権行使者1号39，2号～4号38含む）この議決権総数　87個
出席役員　代表理事（会長）：松田博貴　理事：天野一男　安藤寿男　石橋　隆　磯崎行雄　岩井雅夫　ウォリス サイモン　岡田　誠　緒方信一　笠間友博　狩野彰宏　神谷奈々　小松原純子　小宮　剛　斎藤眞北村有迅　坂口有人　佐々木和彦　沢田健　菖蒲幸男　杉田律子　高嶋 洋　竹内誠　竹下 徹　田村芳彦　中澤 努　奈良正和　西　弘嗣　早坂康隆　平田大二　福冨幹男　廣木義久　保柳康一　三田村宗樹　道林克禎　山路　敦
監事：山本正司
以上　理事36名，監事1名

第1号議案　2018年度事業報告・2018年度決算報告

1）齋藤常務理事から資料にもとづき2018年度の事業報告があった．昨年度行われた事業内容，執行理事会および理事会議決・承認事項について報告が行われた．2018年度には125周年記念事業に関連した事業が執り行われたことが報告された．また，日本地質学会第125回学術大会（札幌大会：2018年9月5日～7日）が開催されたが，北海道胆振東部地震によって二日目以降が中止となり，その代替となる「つくば特別大会」（2018年12月1日～2日）が産総研において開催されたことが報告された．地質学雑誌では，125周年記念特集号の出版を継続して実施し，通常論文の投稿も若干増加し，安定した出版ができたことが報告された．さらに，地質学雑誌のあり方についてのアンケート結果を受けての方針が提示され，新たなカテゴリーとしてレターを開設することが報告された．

なお，2018年5月以降2019年4月までに逝去された会員および今年度において逝去が判明した会員11名（うち名誉会員7名）に対し，黙祷を捧げた．

本議案については，特に質疑応答はなく，全会一致で本議案は承認された．

2）会計担当の西理事から2018年度決算について報告があった．学会員の年齢構成，世代別の入会者数・退会者数の説明ののち，会員数の減少傾向が継続しており，会費収入の減収が続いていることが紹介された．

本議案については，特に質疑応答はなかった．

その後，山本監事より会計監査の実施報告があった．会計事務は適正に処理されているとの報告があった．

本議案については特に質疑応答はなく，全会一致で本議案は承認された．

第2号議案　20w19年度事業計画

松田会長より，2018年度の本学会の事業成果を踏まえた2019年度の事業計画の基本方針が示された．

本議案については，学会資産・予算の将来性，地質学会事業の縮小・拡大，地方支部・他学会との連携，地質学会の魅力増加，公益法人化への意欲，などについて議場からのコメント，質問があった．特に学会運営が３年で破たんする根拠について説明を求められ，会員減少による予算の減少がこのまま継続すれば３年で破たんもあり得ることが収支決算表を元に説明された．さらに，会員減少による予算減少を見越して事務局体制の改革・事業の改変の検討を行っているとの説明があった．一方，公益法人化は公益法人としての事務量の増大にみあった収益事業が見込めないことから，検討していないとの説明があった．

本議案は，賛成86名，保留1名で承認された．

第3号議案　2019年度予算案

西理事より2019年度の予算案について説明がなされた．2018年度予算より収入，支出とも減額となっている．経費節減，事務局体制の改革に努めているものの，来年度は引き当て預金を405万円取り崩す必要があることが説明された．なお，125周年記念事業の終了，経費節減努力などから，引当預金取崩し収入は前年度に比べて減額となっていることの説明があった．また，一般論として法人の場合は，およそ事業1年分の余剰金を準備し清算に備える必要があり，この観点から言えば，繰り越し金が十分であるとは言えないとの補足説明があった．一方で引当金を含む資産等は潤沢との見方もできるとの説明があった．

本議案は，賛成86名，保留1名で承認された．

第4号議案　名誉会員の選出

佐々木名誉会員推薦委員会委員長より，候補者1名について紹介があった．

名誉会員の選出が1名では少ないとの指摘があったが，選考の対象者となるのは各賞受賞候補者，名誉会員候補者の推薦はともに会員（および推薦指定者）からの推薦に基づいている，との回答があった．

本議案は，全会一致で承認された．

以上をもって審議を終了し，議長は閉会を宣言した．

2019年6月20日

以上，決議を明確にするためこの議事録を作成し，議長，副議長および出席代議員，理事がこれに記名，押印する．

一般社団法人日本地質学会2019年度総会
総会議長　内藤一樹
総会副議長　芦寿一郎
議事録署名人　橋本善孝
議事録署名人　福地龍郎
代表理事　松田博貴
理事　齋藤　眞

2018年度事業計画に照らした本年度実績概要

１．学術大会（および学術研究活動）

【札幌大会】 学術大会が，学問の発展に寄与する場となり，本学会の社会におけるプレゼンス向上の場となるよう，札幌大会（2018年9月5～7日）では，「イランカラプテ*－地質学が拓く夢・未来」をテーマとして，地域文化と地質の関係に着目した大会をLOCと共に目指した．種々の企画がLOCにより計画されたものの，平成30年北海道胆振東部地震の発災（9月6日未明）により，2日目以降の学術大会の中止を余儀なくされた．学会創立125周年記念事業の一環である交流協定締結の海外５学会からの招聘研究者との国際シンポジウムも中止となった．

【つくば特別大会等】 上述の札幌大会の一部中止を受け，講演が叶わなかった会員の発表の場の提供を目的として，「つくば特別大会」を2018年12月1～2日に産総研にて開催した．講演申込数は180件，参加者は300名超であった．また産総研との共同主催の予定であった地質情報展ならびに市民講演会については，2019年3月29～31日に札幌にて開催した．

【大会運営】 昨年度の愛媛大会，本年度の札幌大会における天災などの不可抗力による学術大会の開催中止を受けて，来年度以降の学術大会に向けて，1) 開催判断，2) 講演の取り扱い，3) キャンセルポリシー，ならびに4) 代替大会の実施，などに関し検討すると共に，学会指針「緊急時対応」の改定を実施した．

【学術研究】 地球惑星科学系最大の学会として学問発展に寄与するため，学会主導で内閣府に対し「学術大型研究計画」の提案を行った．

２．出版活動

【地質学雑誌】 地質学雑誌では，125周年記念特集号の出版を継続して実施した．また通常論文の投稿も若干増加したこともあり，地質学雑誌を安定して出版することができた．ただし，通常論文だけで月刊を維持するのは，引きつづき厳しい状況にある．また受理後発行までの時間が要していることから，Webでの早期公開を実施した．

【Island Arc誌】 Island Arc誌の出版を継続した．本年（2018年6月26日）のIFは0.889であり，昨年と比較しわずかながら上昇した．さらなるアップを目指し，鋭意努力中である．また受理後掲載までの時間を短縮するためにWiley社と協議し，編集体制を一部変更した．

【ニュース誌】 ニュース誌を毎月刊行し，最近の研究動向などの学術内容の提供に努めた．

【ジオルジュ】 公式広報誌であるジオルジュについては，より多くの市民の目に触れるようフリーペーパー化を実施した．同時に協賛記事の強化により経費の圧縮策が講じられた．

３．地質災害対応

【災害対応】 平成30年7月豪雨（通称，西日本豪雨）ならびに平成30年北海道胆振東部地震の発災に対して，地質学的観点からの会員からの緊急調査・研究について支援を実施した．また地質災害に関して，学会HPを通じて会員ならびに関連機関の調査報告の情報を積極的に発信した．

【災害情報発信】 災害に関する地質学的知識や情報の市民への提供・発信のため，「ぼうさいこくたい2018」（2018年10月13～14日；東京ビックサイト）に出展した．

４．普及活動

【地学オリンピック】 地学オリンピックについては，地学オリンピック支援委員会を中心に継続的に支援を行っているところであり，今年度は第12回タイ国際大会（2018年8月8日～17日）とそれに向けた第10回日本大会への協力を行った．第12回タイ大会では，日本代表4名が金メダル3，銀メダル1を獲得し，国別順位ではアメリカに次ぎ2位となった．ゲスト生徒の2名も銀メダル相当の素晴らしい成績を収めた．加えて，若年層の地質・地球への興味喚起を目指し「小学生のための地学オリンピック：チャレンジ地球」を開催した．

【サマースクール】 地震火山こどもサマースクールについても継続的に支援を行っている事業であり，サマースクール連合企画委員会，運営委員会に協力している．今年度の第19回地震火山こどもサマースクールin伊豆大島ジオパーク「火山島　伊豆大島のヒミツ」（2018年8月7日～8日）には，34名の小・中・高校生の参加があったが，台風来襲のため期間が1日に短縮された．また第20回地震火山こどもサマースクール（京都）の開催に向けて協力を進めている．

【フォトコンテスト】 第9回惑星地球フォトコンテストを開催し，これまでとほぼ同数の590点の応募作品の中から，最優秀賞をはじめ13の入選作品を選出し，総会時に表彰式を行った．

【地質の日】 地質の日については，本部および各支部において普及事業を実施し，また共催・後援等を行った．

【その他】 毎年応募していた文部科学省の科学啓発ポスター「一家に１枚のポスター」に今回採択され（テーマ：日本列島６億年），来年度配布に向け，企画・作成した．

５．社会貢献

【JIS関係】 昨年度に引き続き，日本標準規格(JIS A0204)およびベクトル数値地質図に関する日本標準規格(JIS A0205)の改正を，引きつづき主導的に支援した．

【CPD関係】 企業会員に向け「土質・地質技術者の生涯学習ネット（GEO-Schooling Net)」を利用し企画する講習会・見学会の情報を提供し，参加者へはCPD証明書を発行した．就職支援プログラムは札幌大会にて企画したが，地震により中止となった．

【県の石】「県の石」に関する一般向け書籍の出版に向けて，井龍元会長を中心としたプロジェクトチームが編集作業を行った．

【ジオパーク】 ジオパークについては，平田副会長・ジオパーク支援委員会を中心に，新体制となったJGN（日本ジオパークネットワーク）およびJGC（日本ジオパーク委員会）への協力を進めた．またジオパーク審査に関わる協力体制についてJGNとの協議も始めた．

【情報発信】 学術大会に関するプレスリリースや「チバニアン」に関する会長声明等を発信し，地質学の社会的プレゼンスの向上に努めた．

６．地学教育

【高校地学教育】 平成30年度から使用されている新高等学校理科用「地学」教科書の記述内容について再点検し，意見書を出版社に送付した．また「次期高等学校学習指導要領案に対するパブリックコメント」についても対応した．

【大学入試】 平成31年度大学入試センター試験（本試験）の地学関連科目「地学基礎」「地学」問題を確認し．「平成31年度大学入試センター試験の地学科目に関する意見書」を取り纏め，入試センターに送付した．

【Web教材】 昨年度「ゆめ基金」助成金により小～中学生を対象として作成された教育用Web教材「ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう」について，パンフレットを配布する（計2949枚）と共にデモンストレーション等を実施し，教材のユーザビリティーの検証と普及に努めた．

７．国際連携

【学術交流協定】 学術交流協定を締結している大韓地質学会，タイ地質学会，モンゴル地質学会，ロンドン地質学会，台湾地質学会との交流を継続するとともに，ロンドン地質学会とは学術交流協定を更新する手続きを行った．またタイ地質学会とは学術交流協定更新に向けて，協議を行った．

【国際シンポジウム】 札幌大会においては，125周年記念国際シンポジウムを企画し，各学会から研究者を招聘したが，残念ながら地震により中止を余儀なくされた．しかし別途開催された会合において，今後の各国間の国際交流について意見交換がなされ，学術研究分野における実質的な連携を推進していくことで合意した．

８．学会運営

【事業運営】 昨年度に行った学会財政の見直しを踏まえた各事業の実行にあたり，事業目的の達成度と効果の確認を踏まえて各事業の健全化に努めた．

【地質学雑誌将来構想】 地質学雑誌の出版事業については，会員へのアンケート調査を実施し，ニュース誌を含む出版物の継続的な発

行維持のために，発行回数等の出版形態ならびに電子化について中期的視点に立って出版・財務戦略の検討を実施した．
【広報誌】 学会広報誌の価値を便益化してコストの低減を検討し，一部実行を開始した．
【会員サービス】 会員に対しては，ジオフラッシュやHP，ニュース誌を通じて，さまざまな参加行事の広報を継続的に行ってきた．またHPの充実ならびに英語版についての検討を続けた．これらの活動を通じて学術発表以外のメリットをさらに増やしていく．
【事務局体制】 学会事務局について，業務内容分担を再確認すると共に新たな人員体制による業務の整理統合と効率化による継続的な事務局業務の推進に着手した．
【学会体制】 学会を構成する多くの委員会について，その活動状況を把握し，形骸化あるいは重複している委員会等については業務内容と責任の明確化と委員会の整理・統合に着手した．

９．創立125周年記念事業
【記念式典】 学会創立125周年を迎え，日本地質学会創立125周年記念式典を2018年5月18日（金）に東京（於：北とぴあつつじホール）で開催した．また札幌大会では記念国際シンポジウムを実施予定であったが，胆振東部地震により中止となった．
【記念事業】 創立125周年にあわせて，特別予算により各支部において記念事業を実施すると共に，フォトコンテストにおいては日本地質学会創立125周年記念特別賞の授与を行った．
【地質学雑誌特集号】 地質学雑誌においては，記念特集号の継続的な出版を実施した．
【記念出版】 125周年記念で発行された「はじめての地質学」については，印刷版に加え電子版を出版した．
【実行委員会】 本年度末の創立125周年記念事業計画完了のための諸業務を実施した．

2018年度事業経過報告

１．報告事項
１）会員の動静
2019年4月末現在の会員は，賛助会員27社，名誉会員51名，正会員3436名（うち院生割引78名，学部割引3名），会員総数3514名，2018年4月末と比べて83名の減少であり，その内訳は次のとおりである．
入会者：117（賛助 0社，正会員 117名〔うち院生割引 65名，学部割引 6名〕）
退会者：126（賛助 1社，正会員 125名〔うち院生割引 6名，学部割引 1名〕）
除籍者：63（正会員 63名）
逝去者：11（名誉会員 7名，正会員 4名）［名誉会員：小坂丈予(2011/11/23)，徳永重元(2018/5/8)，小林英夫(8/14)，熊井久雄(10/28)，杉崎隆一(2019/1/3)，中沢圭二(1/15)，吉田尚(3/1)正会員：金森邦夫(2018/4/13)，大沼恵美子(7/21)，堀秀道(2019/1/3)，松居誠一郎(2/13)］
２）学会運営に関する諸集会及び委員会等の活動
＜2018年度定時総会＞
日時：2018年5月19日13:30～15:30
会場：北とぴあ第2研修室
議決権のある社員総数 111名（定足数：56名），議決権の数 111個
出席社員数（委任状および議決権行使書提出者を含む）83名，
議決権の総数 83個，出席理事 32名，出席監事 2名
審議事項：1）2017年度事業報告・決算報告，2）代議員および理事選挙結果，3）2018年度事業計画，4）2018年度予算案，5）名誉会員の選出
いずれの議案も賛成多数で承認．

＜委員会等の開催＞
・執行理事会（9回）議事内容，報告等については，随時HP,ニュース誌に掲載
・理事会（4回）議事内容，報告等については，随時HP,ニュース誌に掲載
・その他委員会（メールによる会議を含め，随時開催）
３）学会の行事・事業
１．日本地質学会第125年学術大会（札幌）
会期：2018年9月5日～7日
会場：北海道大学札幌キャンパス
参加者：692名（会員599名，非会員93名）
・一般発表申込：580件（口頭344件，ポスター 236件）
・シンポジウム(中止)：2件(S1. 125記念国際：口頭6件／ S2.特別：口頭13件）
・アウトリーチセッション：ポスター 2件
・緊急展示ポスター：1件
・優秀ポスター賞の授与：5件(9/5-6実施)
・巡検：実施2コース(プレ:G,H)，中止7コース(ポスト:A,B,C,D,E,F,I)
・ランチョン：実施2件(9/5)
・夜間小集会（中止）
＊9月6日(木)未明に生じた北海道胆振東部地震の影響により，大会2日目(9/6)の行事はほぼ中止，3日目(9/7)の行事は全て中止となった．
＜日本地質学会各賞の授与式・記念講演会＞
日時：9月5日(水)15:30～17:30，会場：総合教育部大講堂(北海道大学札幌キャンパス内)
・来賓挨拶 石森浩一郎氏（北海道大学理学研究院研究院長・学部長）
・日本地質学会小澤儀明賞受賞スピーチ：澤木佑介会員（東京大学総合文化研究科）「多元素同位体比分析を駆使した原生代後期の古環境解読研究」
・日本地質学会柵山雅則賞受賞スピーチ：野崎達生会員（海洋研究開発機構海底資源研究開発センター）「鉱床学は面白い，資源の偏在性には意味がある！そしてたくさんの人達に恵まれてきたことに深謝」
・日本地質学会柵山雅則賞受賞スピーチ：遠藤俊祐会員（島根大学総合理工学部）「沈み込み帯変成作用の広がりの研究」
・日本地質学会国際賞受賞記念講演：Millard (Mike) F. COFFIN氏 (Institute for Marine and Antarctic Studies, University of Tasmania, Australia; School of Earth and Climate Sciences, University of Maine, USA; Woods Hole Oceanographic Institution, USA)「An Engagement with Japan…and Volcanoes, Iron, and Phytoplankton in the Southern Ocean」
２．日本地質学会第125年学術大会（つくば特別大会）
会期：2018年12月1日～2日
会場：産業技術総合研究所つくば本部 共用講堂
参加者：307名（会員262名，非会員45名）
・一般発表：167件（口頭108件，ポスター59件）
・シンポジウム：1件(S2.特別シンポ：口頭13件）
・緊急展示ポスター (追加申込)：3件
・優秀ポスター賞の授与：3件
＜年会関連行事＞
・地質情報展2018北海道―明治からつなぐ地質の知恵―2019年3月29日(金)-31日(日),参加者:1232名
・市民講演会「動く大地のしくみを知り，地震・津波災害に備える」2019年3月30日(土)，参加者：約200名，講師：在田一則，亀田純，高橋浩晃
・若手会員のための業界研究サポート（出展企業多数不在につき，ほぼ中止）
・小さなEarth Scientistのつどい（会場でのポスター発表会は中止．札幌大会会期後，デジタルポスター発表会を実施し，審査）
・『せめぎ合う大地―新北海道創成記』刊行記念スライドトーク（中止）
＊北海道胆振東部地震の影響により，大会2日目(9/6)以降の関連行事はすべて中止．地質情報展と市民講演会は，新たな会期を設けて実施した．
３．地質の日ほか，本部イベント
・街中ジオ散歩 in Kawasaki「多摩丘陵の100万年を歩く」徒歩見学会（2018年度地質の日記念 兼 日本地質学会125周年記念事業，日本応用地質学会との共催行事）：5月13日(日)，参加者30名，講師：山崎晴雄，増渕和夫
・ミニシンポジウム「日本地質学会のジオパークへの学術的貢献」(ジオパーク支援委員会主催)，5月19日(土)，北とぴあ，参加者30名．
・第9回惑星地球フォトコンテスト表彰式：5月19日(土)，北とぴあ，審査委員長：白尾元理
・惑星地球フォトコンテスト入賞作品巡回展示（2017年4月～2018年3月）［銀座プロムナードギャラリー 4月28日(土)～5月12日(土) [第7,8,9回入選作品]／深田研一般公開

2018 (深田地質研究所)　10月7日(日)[第9回入選作品，第6,7,8回ジオ鉄賞作品] ／蒲郡生命の海科学館　11月17日(土)～2019年2月11日(月・祝) [第9回入選作品]

・小学生のための地学オリンピック―チャレンジ地球―：クイズ30（9月17日(月・祝)東京会場：参加者2名，10月7日(日)つくば会場：参加者なし）．ジオパーク探検：10月7日(日)，筑波山地域ジオパーク(参加者＋保護者)：3組6名)，講師：玉生志郎，酒井彰

4．創立125周年記念事業

・125周年記念式典（講演会・式典），祝賀会

日時：2018年5月18日(金) 10:30～18:30，　会場：北とぴあ

参加者：記念式典：174名（うち来賓40名），祝賀会（101名）

＊第一部 記念講演会（10:30～12:15，つつじホール）「地質学はどこで生まれ，どこへ行くのか」，講師：矢島道子(125周年記念事業実行委員長)

＊第二部 記念表彰式（13:30～16:00，つつじホール）

125周年記念特別表彰：（個人4名，団体6団体）

（個人）阿部國広（地学教育の推進に貢献）／小玉喜三郎（地質学の社会的認知拡大に貢献）／佐藤　正（国際研究活動の推進に貢献）／橋辺菊恵（日本地質学会の発展に貢献）

（団体）株式会社朝倉書店（地学図書出版活動の推進に貢献）／共立出版株式会社（地学図書出版活動の推進に貢献）／一般社団法人全国地質調査業協会連合会（地質学の実社会への応用に貢献）／特定非営利活動法人地学オリンピック日本委員会（高校生の地学教育推進と地学の普及に貢献）／特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク（ジオパーク整備と地質学の普及に貢献）／日本放送協会（放送事業を通じ，地学の国民的啓発に貢献）

＊第三部 記念祝賀会（16:30～18:30，東部サロン16F・天覧の間）

・札幌大会にて，学術交流協定を締結している海外5学会(イギリス，韓国，タイ，モンゴル，台湾)の代表者を招聘．大会2日目(9/6)に125周年記念国際シンポジウムを開催する予定であったが，北海道胆振東部地震の影響により中止．学会本部にて国際交流代表者意見交換会を実施．

・「ジオルジュ」英語版特別号を学会ホームページ上で全文ダウンロード可能にした．

・125周年記念事業への醵金(醵金者名等は学会ホームページに掲載)

個人会員（1口5千円以上：計199名[586口]）

賛助会員，企業・団体：計36団体（1口5万円以上：35団体[52口] ／ 1口未満：1団体）

5．Web教材『ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう』の利用実績

・教材URLへのアクセス数(2018年度)：7666件

・会員や団体からのWeb教材ほかポスター，パンフレット，ハンドブックの利用申請数：22件（配布内訳：ポスター (48枚)，パンフレット(2949枚)，ハンドブック(ルーペ付き，1382冊)）

6．地質学者に答えてもらおう（2012年3月～運用開始）

運用開始からの質問件数の総数は167件(うち，2018年度中に届いた質問は30件)．これまでの質問の主なものとその答えは学会HPにて公開中．

4）出版物の刊行

＜地質学雑誌＞

・124巻4号(2018年4月)～125巻3号(2019年3月)を刊行した．総ページ数は1089ページ．

＜日本地質学会ニュース＞

・21巻4号(2018年4月)～22巻3号(2019年3月)を発行した．総ページ数は312ページ．

＜Island Arc＞

・Island Arc 編集委員会の編集により，Wiley社　よりVol.27,Issue 3～Issue 6，Vol.28,Issue 1～Issue 2 を刊行した．総ページ数は685ページ．

＜ジオルジュ＞

・英語版特別号，前期号（2018年5月），後期号（同年11月）各20ページを発行．2018年前期号から，六大都市(札幌,仙台,東京,名古屋,大阪,福岡)のジュンク堂にて，数量限定でフリーペーパーとして配布．

＜リーフレットほか＞

・たんけんシリーズ３「城ケ島たんけんマップ」2018年10月増刷(第4刷，3000部)．

・下敷き「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」2019年2月増刷(1500枚)．

＜その他＞

・「はじめての地質学」（ベレ出版）の電子版を発行．

・「理系に育てる基礎のキソ 地球のお話365日」(技術評論社) 2018年12月21日発売（編著：土屋 健, 著：ジオルジュ編集部, 協力：日本地質学会）．

・「地球全史スーパー年表」(岩波書店)の増刷(4刷1500部，製本1000部)．

5）関連外部委員会への協力

下記の関連外部委員会等に対して本学会から選出された委員．継続してそれぞれの活動，関連学会の発展と連携に協力した．

日本地球惑星科学連合：評議員（松田博貴），連絡委員（緒方信一）,プログラム委員（岡田 誠，板木拓也），ダイバーシティ推進委員会（宮下由香里）,環境・災害対応委員会-災害の委員（川畑大作），環境・災害対応委員会-環境の委員（小荒井 衛）,ジャーナル企画経営委員（ウォリス　サイモン），ジャーナル編集委員（井龍康文），自然史学会連合（斎木健一），地質技術者教育委員（CPD：担当者未決定（代理)天野一男)，JABEE運営委員：竹内真司），地質の日事業推進委員会（委員長：平田大二），日本ジオパーク委員会：調査運営部会委員（利光誠一），(NPO)地学オリンピック日本委員会広報小委員会（坂口有人），地震火山サマースクール実行委員（講師 川邊禎久），防災学術連携体連携委員（齋藤　眞(常務理事,前：地質災害委員長)，松田達生(現：地質災害委員長)）など．

6）その他報告事項（主に他学協会との共催・後援，協賛行事など，開催時期に関わらず2018年度内において承認したもの）※そのほかはNews誌，HPに掲載の執行理事会議事録，理事会議事録参照．

＜他学協会などからの依頼＞

・2018年度一般社団法人日本地球化学会第65回年会(2018/9/11-13，琉球大学)の共催．

・新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館企画展示「ジオパークのミュウジアム展」(7/7-8/31)の後援．

・朝日新聞社主催「第16回高校生科学技術チャレンジ(JSEC2018)」の後援（作品募集期間：9/1-10/5）．

・日本ゼオライト学会「第34回ゼオライト研究発表会」(11/29-30)の協賛．

・学術会議総合工学委員会原子力安全に関する分科会主催「原子力総合シンポジウム2018」(10/22)の共催．

・石油技術協会「平成30年度秋季講演会」（11/1，東京大学小柴ホール））の協賛．

・兵庫県立博物館，県政150周年記念国際シンポジウム「巨大恐竜，竜脚類の謎に迫る」（12/8開催）の後援．

・日本アイソトープ協会「第56回アイソトープ・放射線研究発表会」(2019/7/3-5)の協賛．

・深田地質研究所「深田研一般公開2018」(10/7)の協力（フォトコン写真の貸し出し）．

・こどものためのジオカーニバル企画委員会(代表者：廣木義久)，第19回こどものためのジオカーニバル（11/3-4，大阪）の後援．

・蒲郡市生命の海科学館企画展示「第9回惑星地球フォトコン入賞作品展」(11/17～2019/2/11)の後援．

・東北大学東北アジア研究センター公開講演会「地球生命の起源と進化：ひとの誕生と現在から近未来の課題まで」(2019/2/23)の後援．

・NPO法人地学オリッピック日本委員会，地球科学普及講演会「地球をぶらり」(11/24)の後援．

・日本考古学協会，第85回総会のセッション「黒曜石の新局面（仮題）」の共催．

・科学教育研究協議会「第66回全国研究大会(福岡大会)」(2019/8/9-11）の後援．

・筑波大学朝永振一郎記念第14回「科学の芽」賞（作品募集期間：2019/8/19-9/21）の後援．

・日本工業新聞社主催「地盤技術フォーラム2019」(2019/9/11-13，東京ビッグサイト）の協賛．

・三浦半島活断層調査会（会長：茅野教幸）地質の日記念講座「三浦活断層群主部，北武断層」(2019/5/4)の後援．

・日本粘土学会第63回粘土科学討論会

(2019/09/10-12，埼玉大学）の後援.
・ジオ神奈川(代表：蟹江康光)，地質の日行事「城ヶ島　火山と地震痕跡を見る」(2019/5/18)の後援.
・三浦半島活断層調査会「荒崎海岸の地形と地質を学ぶ」(2019/6/9)の後援.
・日本科学技術振興財団「青少年のための科学の祭典2019」(2019/6/8～2020/2/16，全国55会場)の後援.
＜他学協会などへ依頼＞
・第10回惑星地球フォトコンテストについて，後援および協賛を依頼し承諾された.（　）は後援および協賛金.
後援：日本ジオパークネットワーク（3万円），深田研ジオ鉄普及委員会（1万円）
協賛：株式会社ウィンディーネットワーク（5万円）
・第126年学術大会：山口大会のセッション共催：堆積地質部会に関わる4 セッションについて，日本堆積学会，石油技術協会探鉱技術委員会と日本有機地球化学会へ共催を依頼し承諾された.［R9：堆積物（岩）の起源・組織・組成／ R10：炭酸塩岩の起源と地球環境／ R11：堆積過程・堆積環境・堆積地質／ R12：石油・石炭地質と有機地球化学］
・街中ジオ散歩 in Hamura (2019/5/12(日)，東京都羽村市羽村取水堰周辺)について，羽村市教育委員会へ後援を依頼し承諾された.
・一家に１枚ポスターの普及・広報活動について，次の4団体に後援を依頼し承諾された．日本古生物学会，（一社）日本鉱物科学会，(NPO)地学オリンピック日本委員会，(公社)地球惑星科学連合

7）支部の活動

＜北海道支部＞
1．支部例会（6/16(土)）．個人講演6件，招待講演1件，参加者：35名．招待講演：「北海道の地震発生ポテンシャル評価に向けた震源断層マッピング」，講師：佐藤比呂志（東京大学地震研究所）
2．「地質の日」記念展示：北海道のジオサイトに見る化石（4/27(金)～6/17(日)，北海道大学総合博物館），主催：「地質の日」展示実行委員会・北海道大学総合博物館，共催：日本地質学会北海道支部・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・北海道博物館・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会，後援：北海道教育委員会・札幌市・札幌市教育委員会
協力：NPO法人北海道総合地質学研究センター.
関連する市民セミナー (会場：北大総合博物館「知の交流」ホール)
・第一回「北海道の石！砂白金」(5/13(日))，講師：中川　充（産総研地質調査総合センター），参加者：90名.
・第二回「北海道における地質学の調査･研究の事始め～北海道命名150年によせて～」(6/4(月))，講師：松田義章（北海道総合地質学研究センター），参加者：80名.
関連する巡検
・「街中ジオ散歩 in Sapporo　ジオサイト「藻岩山」を歩く」(5/26(土))，案内者：岡村 聡（北海道教育大学札幌校），宮坂省吾（NPO法人北海道総合地質学研究センター），参加者: 20名.
＜東北支部＞
1．2018年度日本地質学会東北支部総会・講演会 (2019/3/16(土)，秋田大学教育文化学部3号館150番教室)，個人講演17件：口頭発表12件，ポスター発表5件，参加者：30名.
＜関東支部＞
1．地質技術伝承会「ノンテクトニック構造－地すべり粘土と流入粘土－」(4/21(土)，北区北とぴあ)，講演者：山根　誠氏(応用地質㈱技術本部技師長)，共催：関東地質調査業協会，参加者：76名.
2．地質見学会
・アウトリーチ巡検「箱根～北伊豆地域の自然災害の跡を巡る」(8/7(火)～8(水))，講師：小林 淳(首都大学東京 特任准教授)，笠間友博(幹事長，神奈川県博)，参加者：13名.
・伊豆大島巡検（11/22(木)～24(土)），講師：川邉禎久（産総研），千葉達朗（アジア航測㈱）,参加者：30（島内より8）名.
・125周年記念都内徒歩巡検（10/21(日)，皇居周辺)，講師：中山俊雄（東京都生涯学習センター），参加者30名.
3．フィールドキャンプ(8/20(月)～25(土)，千葉県鴨川市清澄東大演習林)，京都大学と同時開催，協力:株式会社ダイヤコンサルタント，石油資源開発株式会社，参加者：3名.
4．サイエンスカフェ「磁場ニャン？？いやいや，チバニアン」(1/27(日) イタリアンレストランACQUA E SOLE（アクアエソーレ）ダイワロイネットホテル千葉中央 1階)，講師：岡田誠氏（茨城大学），ファシリテーター岡山悠子（科博SCA），参加者：31名.
5．シンポジウム「関東の地形地質と自然災害」，後援：早稲田大学，協賛：アサヒ地水探査㈱，㈱ダイヤコンサルタント，㈱地圏総合コンサルタント，大和探査技術㈱，参加者53名.
6．支部活動
・支部総会（4/21(土)，北とぴあ）：活動報告，会計報告，活動計画，予算
・支部功労賞授与（2件）：本間岳史氏，ミュージアムパーク茨城県自然博物館
・幹事会：11回開催（1回/月程度）
＜中部支部＞
1．中部支部2018年支部年会（6/16(土)，山梨大学教育学部）総会，シンポジウム，個人講演およびポスター発表
シンポジウム：「南部フォッサマグナの過去・現在・未来」講演者3件，総合討論．個人講演5件，ポスター発表3件，優秀なポスター発表に対して中部支部優秀学生ポスター賞を授与．参加者25名.
共催：山梨大学，山梨大学教育学部，後援：山梨県，山梨大学山岳科学特別教育プログラム
＜近畿支部＞
1．行事報告
・第35回地球科学講演会「都市大阪を生んだ土地のなりたち―遺跡の地層から読む―」(「地質の日」行事，5/13(日)，自然史博物館講堂)．講師：趙 哲済（大阪文化財研究所），主催：地学団体研究会大阪支部・日本地質学会近畿支部・大阪市立自然史博物館．参加者：79名.
2．協賛行事
・「奈良盆地の地盤情報を学ぶ」講習会(9/28(金)，大阪大学中之島センター)，
・KG-NET・関西圏地盤研究会・(一社)関西地質調査業協会との共催．参加者：103名.
3．リーフレット「近畿の地質景観」．原稿は8割方収集（次年度完成に向けて進める）.
＜四国支部＞
1．2018年日本地質学会四国支部巡検「眉山の青色片岩と岩盤クリープ」(12/15（土)，徳島市眉山)，案内者：青矢睦月・西山賢一，参加者：17名（案内者除く）.
2．第18回日本地質学会四国支部総会・講演会（12/15（土)，徳島大学総合科学部3号館1階スタジオ)，参加者：40名，個人講演：口頭発表7件（特別講演1件，一般講演6件)，ポスター発表8件.
＜西日本支部＞
1．地質の日「くまもと大会」．熊本大学・県内博物館・県内資料館等との共催．(6/2(日)，熊本市中央区上通町2番（びぷれす広場)）．来場者 約900名.
2．山口大学サイエンスワールド（後援）．(10/27(日)，山口大学吉田キャンパス)，参加者(総来場者)：1,000 名超.
3．西日本支部2018 年度総会・第170回例会(2019/3/2(土)，長崎大学教育学部)
【例会】口頭発表20 件，ポスター発表17 件．参加者：50 名.
【総会】2018 年度事業等活動総括・決算・監査報告，2019年度事業計画・予算・新役員について審議．2019 年度事業，地質の日くまもと大会：2019/5/11（共催)，山口大学サイエンスワールド：2019/10～11頃（後援)，2019 年度総会・西日本支部第171 回例会：2019/2～3 北九州いのちのたび博物館（予定).
2．執行理事会および理事会議決・承認事項
1) 会長(代表理事)，副会長の選出.
会長：代表理事に松田博貴，
副会長(2名) 佐々木和彦，平田大二
2) 理事会議長・副議長の選出
議長：狩野彰宏，副議長：杉田律子
3) 執行理事の選出，部会長（○印）の選出.
常務理事：斎藤 眞，副常務理事：安藤寿男
運営財政部会：○緒方信一（総務)，西　弘嗣（会計）

広報部会：○坂口有人（広報），小宮　剛（編集出版，企画出版兼務）
学術研究部会：○磯崎行雄（学術研究），ウォリス　サイモン（国際交流）・岡田　誠（行事），辻森　樹（県の石）
編集出版部会：○大藤　茂（地質学雑誌），田村芳彦（IAR）
社会貢献部会：○星　博幸（地学オリンピック），廣木義久（教育），中澤　努（社会貢献）
4) 各賞選考委員会委員の選出．任期2年．
＊理事の互選(10名)：折橋裕二，笠間友博，亀尾浩司，川端清司，小松原純子，菖蒲幸男，
(委員長)竹内　誠，保柳康一，道林克禎，山口耕生
＊役職指定委員(８名):(前・現地質学雑誌編集長・副編集長)山路　敦，大藤　茂，中澤　努，岩森　光，(前・現アイランドアーク編集長)田村芳彦，武藤鉄司，伊藤慎，海野 進
5) 京都大学防災研究所の国際共同利用・共同研究拠点認定の推薦に関する要望書を文部科学大臣あてに提出．
6)「チャレンジ地球」―小学生のための地学オリンピックの実施:日本地質学会（地学オリンピック支援委員会）主催として行うことを承認．
7) チバニアンの国際標準模試地の審査経緯への対応について，「チバニアン」に関する声明（学術的意味の説明と本学会の見解）をホームページ等に掲載．
8)「一家に１枚」ポスター企画応募：“日本全国県の石”と“地球の内部―地殻の底：モホ面”の2件を応募．結果は前者が採択．文科省と内容の検討を重ね，最終的なポスター名称は『日本列島7億年』として2019年4月に刊行．
9) 編集委員会の新体制発足：(委員長)大藤茂，(副委員長)岩森 光，中澤　努．
10)“地質学雑誌のあり方についてのアンケート”を実施(アンケート期間：6月～9月末)．回答数は388件．アンケート結果を基に地質学雑誌タスクフォースが答申した（ニュース誌2019年6月号参照）．
11) 巡検の緊急時対応用のレンタカー使用について，使用マニュアルを作成し巡検案内者に方針を示した．
12) 啓林館発行「地学改訂版」教科書の点検について，改訂版の出版に対し出版社と文部科学省へ礼状を送付した．
13) 地学オリンピック日本委員会の依頼により，第11回オリンピック予選・本選の出題委員に委員1名を推薦．
14) 日本学術会議と防災学術連携体による西日本豪雨に関する緊急報告会の開催：発表公募に対し，会員から1件の応募を了承（越智秀二会員[西日本支部]，演題「花崗岩の風化特性とそれに応じた砂防・治山のあり方について～8.20広島豪雨災害と西日本豪雨災害の現場から～」）．
15) ジオルジュの今後(2018後期号以降)の発行について，フリーペーパー化をはかり，全国展開の書店(ジュンク堂の主な店舗)にて配布されることとなった．経費削減の努力することで，年2回の出版を承認．
16)「平成30年北海道胆振東部地震」に関する会長談話を学会ホームページ等に掲載．
17) 地球惑星連合の2019年プログラム委員の推薦：(正) 岡田　誠 ／ (副) 板木拓也
18) 自然史学会連合(大路樹生会長)からの，ブラジル国立博物館の火災被害に関する声明文について，所属学会に対する賛同要請を了承．
19) 札幌大会の代替行事「第125年学術大会つくば特別大会」を開催することとした．
20) 2019年3月29日～31日に開催の「地質情報展2019北海道(主催：産業技術総合研究所地質調査総合センター)」の共催の承諾．「市民講演会(主催：日本地質学会)」の3月30日の開催を承認．
21) 2020年年会開催地の決定:2019年以降の開催地は次の通り．
2019年　西日本支部：山口大学（2019/9/23(月・祝)～25(水)）
2020年　中部支部：名古屋大学（実行委員長：大路樹生，事務局長：道林克禎）
2021年　関東支部：会場，日程等，未定
22) 地質学雑誌の通常原稿の早期公開を承認．
23)「はじめての地質学」について，出版社より電子版出版の要望にたいし，全著者の了解を得て承諾．
24) 2018年度内（4月または9月の年会以降）の部会長の交代．(堆積地質)酒井哲弥，(構造地質)山路　敦
25) 山口大会の普及事業(市民講演会，地質情報展)にたいし，科研費(研究成果公開促進B)を申請し採択された．補助金額120万円．
26) 名誉会員推薦委員会委員の選出．
・委員長：佐々木副会長，
・階層別委員(4名)：官公庁：佃　栄吉，小中高教員：米澤正弘，会社：向山　栄，大学：伊藤谷生
・職責委員(各支部長7名)：竹下 徹，林 信太郎，山崎晴雄，大藤 茂，三田村宗樹，西山賢一，早坂康隆
・理事会推薦委員(1名)：磯崎行雄
27) 各賞選考委員会の下に各賞選考検討委員会を設置し，日本地質学会賞，国際賞，小澤儀明賞選考の諮問をした．
・(指定委員)：渡部芳夫(委員長)，松田博貴，荒井章司，ウォリス　サイモン，山路敦，大藤　茂，伊藤　慎，海野　進，田村芳彦，武藤鉄司，(執行理事会推薦委員)：斎藤文紀
・Island Arc賞については，Island Arc編集委員会に選考を諮問した．
28) 2019年度山田科学財団研究助成について，2件の推薦を承認．
29) (独)大学改革支援・学位授与機構からの要請により，専門委員(国立大学教育研究評価委員会専門委員および機関別認証評価委員会)候補者として，会員5名を推薦．
30) 第7回防災学術連携シンポジウム「平成30年夏に複合的に発生した自然災害と学会調査報告」(2019年3月12日(火)，学術会議)に，地質学会は小荒井衛会員に発表を要請し，「地形・地質情報から知る災害リスク―関東東部を事例に―」のポスター発表を行った．
31) 山口大会の運営委託は近畿日本ツーリスト広島支店に決定．
32) タイ地質学会との学術交流協定更新について意見交換のため，ウォリス理事がタイを訪問(2019年3月28日～31日)．
33) ロンドン地質学会(2018年9月)，タイ地質学会(2019年4月)との学術交流協定書を更新．
34) 大型研究計画について，『地球惑星研究資料のアーカイブ化とキュレーションシステムの構築』を提案．
35) 2019年度第10回惑星地球フォトコンテストの審査結果（応募総数348点）：最優秀賞1件，優秀賞2件，ジオパーク賞1件，日本地質学会長賞1件，ジオ鉄賞1件，スマホ賞1件，入選5件，佳作4件を選出．表彰式は5/25(土)に行う．
36) (独)大学入試センターへ，平成31年度大学入試センター試験の地学関連科目に関する意見書を提出．
37) 東赤石山の山小屋“赤石山荘”の存続支援要請を承諾し，新居浜市および愛媛県への要望書を作成．要望書は支援団体により5月に提出予定．
38)“学術大会に関する緊急時対応(2014年7月作成，2016年1月改定)”を改定し，山口大会から適用することとした．
39) 2018年度事業報告・決算案を承認した．
【１号議案】
40) 次の38名の会員を50年会員として顕彰することとした．
青島睦治，足立　守，石川政憲，猪俣道也，岩田　修，大木公彦，岡田正明，久保和也，小林文夫，佐藤博明，佐藤光男，下山正一，庄司勝信，田結庄良昭，滝田良基，田中隆，田中　剛，田中伸廣，田村幹夫，塚田有一郎，塚原弘昭，手塚恒人，照井一明，鳥海光弘，馬場勝良，樋口茂生，藤本幸雄，星野光雄，増田富士雄，宮田隆夫，村松憲一，森山義博，両角芳郎，矢口良一，山根一夫，山本哲也，吉田武義，吉松敏隆
41) 2019年度事業計画および2019年度予算案を承認した．【2号議案，3号議案】
42) 名誉会員推薦委員会から候補者として提案された，小玉喜三郎会員を総会に推挙することとした．【4号議案】
43) 各賞選考委員会より提案された下記の各賞授賞者を承認した．
・<u>日本地質学会賞（１件）</u>
多田隆治（東京大学大学院理学系研究科）
対象研究テーマ：精密な層序ならびに堆積物分析に基づく環境変動史解明
・<u>日本地質学会国際賞（１件）</u>
Robert J. Stern（テキサス大学ダラス校）

対象研究テーマ：島弧—海溝系およびプレートテクトニクスの研究
・日本地質学会小澤儀明賞（１件）
齋藤誠史（Laboratoire Magmas et Volcans, Université Clermont Auvergne）
対象研究テーマ：古生代末の絶滅事件と特異な還元海洋環境の出現に関する研究
・日本地質学会 Island Arc 賞（１件）
授賞論文：Catherine Chagué-Goff, Jordan Chi Hang Chan, James Goff, and Patricia Gadd, 2016, Late Holocene record of environmental changes, cyclones and tsunamis in a coastal lake, Mangaia, Cook. Islands. Island Arc, 25, 333－349.
・日本地質学会論文賞（２件）
授賞論文：佐野弘好，2018，岐阜県西部，舟伏山岩体東部の美濃帯ペルム系～三畳系チャート優勢層の層序と年代．地質学雑誌，124，449-467.
授賞論文：Hitoshi Hasegawa, Hisao Ando, Noriko Hasebe, Niiden Ichinnorov, Tohru Ohta, Takashi Hasegawa, Masanobu Yamamoto, Gang Li, Bat - Orshikh Erdenetsogt, Ulrich Heimhofer, Takayuki Murata, Hironori Shinya, G. Enerel, G. Oyunjargal, O. Munkhtsetseg,Noriyuki Suzuki, Tomohisa Irino, Koshi Yamamoto, 2018, Depositional ages and characteristics of Middle–Upper Jurassic and Lower Cretaceous lacustrine deposits in southeastern Mongolia. Island Arc, 27, DOI: 10.1111/iar.12243.
・日本地質学会研究奨励賞（２件）
加瀬善洋（北海道立総合研究機構地質研究所）
対象論文：加瀬善洋・仁科健二・川上源太郎・林　圭一・高清水康博・廣瀬　亘・嵯峨山　積・高橋　良・渡邊達也・輿水健一・田近　淳・大津　直・卜部厚志・岡崎紀俊・深見浩司・石丸　聡，2016，北海道南西部奥尻島で発見された津波堆積物．地質学雑誌，122, 587–602.
葉田野　希（信州大学大学院総合工学系研究科）
対象論文：葉田野　希・吉田孝紀，2018，瀬戸内区中新統瀬戸陶土層の古土壌構成が示す古風化および古気候条件．地質学雑誌，124，191–205.
・日本地質学会表彰（３件）
株式会社新興出版社啓林館 および 数研出版株式会社
表彰業績：教科書出版を通じた地学教育への貢献
加納　隆（山口大学名誉教授）
表彰業績：地球科学標本室・ゴンドワナ資料室の整備と普及活動
44) 事務局体制について
・2018年12月末日をもって橋辺菊恵事務局長の退職．事務局長業務引継ぎのため，橋辺氏とのパート事務局員の雇用契約を結ぶ（2019年1月より6ヶ月）．
・2019年1月1日より新事務局長として秋葉文雄氏の就任を承認．就任後，秋葉氏の体調不良が判明し退職（2019年1月8日付，承認）．
・現実的な事務局体制を構築するため，事務局契約職員（1名）をハローワークを通じて募集し，植田律子さんを採用（2019年4月16日より就業）．
45) 今後の事務局運営に関し，法律の改正を踏まえた「事務局員就業規則」の改定，「契約職員規定」等の策定を承認．
46) 地質学雑誌投稿編集出版規則および細則の改正を承認（改正後の規則は学会HP，地質学雑誌125巻4号巻末(改正箇所はアンダーライン) を参照）．
47) ジオパークネットワークの要請により，ユネスコ世界ジオパーク国内推薦申請にかかる机上審査の事務局の引き受けを承諾した．
48) 5月25日開催予定の総会議案を承認．

2019年度事業計画骨子

（１．学術大会）

学術大会が学問の発展に寄与する場となり，本学会の社会におけるプレゼンス向上の場となることを目指し，第126年学術大会（2019年山口大会）を2019年9月23日（月・祝）～25日（水）に山口大学で開催する．

（２．学術研究活動）

地球惑星科学系最大の学会として，地質学および関連学問分野の進化・発展に寄与するため，学会が主体となって大型研究等の立案・推進に努めると共に，学術会議等への提言などを通して地質学の継続的発展を目指す．また学術大会等を活用して将来へ向けての学術研究の幅広い展開を促進すると共に，専門性の高い部会と地域に根ざした支部との連携を図る．

（３．出版活動）

地質学雑誌およびIsland Arc誌の安定した出版と優れた論文の確保のため，引きつづき専門部会等と協力して投稿数増に努めることに加え，地質学雑誌では新規特集号の企画についても積極的に推進する．また受理後掲載までの時間短縮に向け，不断の努力を行う．

公式広報誌「ジオルジュ」については，ジオパークや地学オリンピック，博物館，スポンサー等との連携と財務構造の改善を進め，安定的な発行の維持しつつ，さらに市民への広範な広報に努める．

（４．地質災害対応）

地質災害の発生に迅速に対応する体制を再構築し，地質学的観点からの緊急調査・研究を推進すると共に，地質災害ポータルからの情報発信に努める．

専門部会・支部，ならびに防災学術連携体としての学会活動を通じて，災害に関する地質学的知識や情報の社会への提供・発信を継続する．

（５．普及活動）

学会公式サイト(HP)，ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)「ちーとも」，広報誌「ジオルジュ」，リーフレット，フォトコンテスト，講演会などのサービスや機会を継続すると共に，新たにTwitter等を活用して社会への情報発信を強化する．特にHP内容の再点検と充実を図る．

地学オリンピック，地震火山こどもサマースクール等へ継続的に支援を行うとともに，「県の石」の継続的な普及と「日本地質学会選　県の岩石・鉱物・化石」の出版に向け学会をあげて取り組む．

地質情報展や地質の日の事業の共催・支援を通じて，広く地方地質の普及に貢献する．

（６．社会貢献）

地質図の記号等に関する日本標準規格（JIS A0204）およびベクトル数値地質図に関する日本標準規格（JIS A0205）の改正を引きつづき支援し，ICSの国際層序単元の日本語版の更新や層序単元登録の体制整備を進めるとともに，学会活動や地質学雑誌等の出版活動において地質標準の整備を促進する．

また引きつづきプレスリリースや学会声明等をタイムリーに発信することにより，地質学の社会的プレゼンスの向上に努める．

地質技術者の継続教育の充実に向けては，CPD参加票発行によるサービス強化を引きつづき図る．

（７．地学教育）

平成32年度大学入試センター試験（本試験）の地学関連科目の「地学基礎」「地学」問題を確認し，改善等が必要であれば意見書として取り纏め，入試センターに送付するとともに公表する．また平成32年度から新たに実施される「大学入学共通テスト」の試行テストの地学関連問題についても確認し，改善等が必要であれば意見書として取り纏め，入試センターに送付するとともに公表する．

「ゆめ基金」助成金事業で作成した小～中学生を対象とした教育用教材「ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう」については，４年計画の３年目にあたり，教材の普及にあたると共に，教育現場・利用者からのフィードバックを元にユーザビリティーの向上に努める．

（８．国際連携）

学術交流協定を締結している大韓地質学会，タイ地質学会，モンゴル地質学会，ロンドン地質学会，台湾地質学会との交流について，より実質的な学術活動の連携を図る．

また大韓地質学会から要請のあったIGC2024（2024年釜山開催）での巡検の準備作業を進める．

（9．学会運営）

学会中期ビジョンにおける財務の中期計画と会員減少モデルに基づき，財務体質強化と各事業の健全化に努め，事業目的の達成度と効果の確認を踏まえた事業構成の見直しを行う．

地質学雑誌の出版事業については，2018年度に実施した会員アンケート結果を元に，中期的な出版・財務戦略を策定し，2020年度中の実施を目指す．

会員サービスについては，就職支援，地質技術者の継続的な専門教育（CPD）に連携した地域型講演会・ワークショップ等の従来型事業の継続に加えて，学会への新規入会・定着に資する若手会員向けの学会機能やシニア会員の活躍の場の創成等を検討する．

学会組織については，2018年度に実施した各種委員会・組織の実態調査を踏まえ，業務内容・責任の明確化を進めると共に，必要に応じ委員会の整理・統合，効率化を進める．

学会事務局体制については，新たな人員体制の元での業務の整理・統合と効率化によって，継続的な事務局業務を進める．

※次頁より以下の財務諸表を掲載する．

財務諸表

・2018年度収支決算（2018年4月1日～2019年3月31日）
・収支計算書（2018年4月1日～2019年3月31日）
・計算書類に対する注記（2018年度）
・収支計算書に対する注記（2018年度）
・財産目録（2019年3月31日現在）
・貸借対照表（2019年3月31日現在）
・正味財産増減計算書（2018年4月1日～2019年3月31日）
・会計監査報告書
・2019年度収支予算（2019年4月1日～2020年3月30日）

一般社団法人日本地質学会2018年度収支決算

（2018年4月1日～2019年3月31日）

科　目	2018年度予算	2018決算	差 異
Ⅰ事業活動収入の部			
1.事業活動収入			
1）基本財産運用収入	2,500	2,542	−42
基本財産利息収入	2,500	2,542	−42
2）特定資産運用収入	2,200	2,810	−610
特定資産運用収入	2,200	2,810	−610
3）会費収入 1）	41,205,000	41,652,650	−447,650
正会員会費収入	38,000,000	38,566,650	−566,650
正会員院生割引会費収入	1,420,000	1,376,500	43,500
正会員学生割引会費収入	85,000	47,000	38,000
賛助会員会費収入	1,700,000	1,662,500	37,500
4）事業収入	33,267,800	27,269,123	5,998,677
①出版事業収入 2）	9,370,000	10,658,565	−1,288,565
雑誌販売収入	2,200,000	2,370,300	−170,300
雑誌印刷負担金収入	2,800,000	4,070,000	−1,270,000
別刷収入	700,000	553,525	146,475
広報誌販売収入	20,000	9,200	10,800
論集収入	40,000	22,860	17,140
リーフレット販売収入	600,000	421,480	178,520
バックナンバー等売上収入	10,000	0	10,000
その他出版物収入	50,000	47,145	2,855
広告料収入	400,000	54,000	346,000
広報誌企画料	450,000	670,000	−220,000
アイランドアーク編集費・関連収入	1,900,000	2,216,156	−316,156
雑収入	200,000	223,899	−23,899
②年会開催事業収入 3）	8,600,000	7,996,031	603,969
参加登録費収入	6,000,000	5,681,000	319,000
懇親会参加費収入	1,000,000	1,025,000	−25,000
資料等販売収入(講演要旨)	200,000	151,500	48,500
展示収入	900,000	759,240	140,760
広告収入	300,000	280,476	19,524
雑収入	200,000	98,815	101,185
③普及事業収入	520,000	438,682	81,318
普及イベント参加費収入	50,000	72,882	−22,882
普及資料等販売収入	450,000	365,800	84,200
雑収入	20,000	0	20,000
④支部・部会等活動事業収入	1,800,000	1,301,350	498,650
イベント参加費収入	1,600,000	1,161,850	438,150
資料等販売収入	100,000	49,500	50,500
負担金収入	50,000	60,000	−10,000
雑収入	50,000	30,000	20,000
⑤125周年記念事業収入 4）	4,270,000	4,334,360	−64,360
125周年記念事業寄付金	3,770,000	3,845,000	−75,000
雑収入	500,000	489,360	10,640
⑥補助金・寄付金等収入 5）	400,000	950,500	−550,500
出版事業に係る補助金・寄付金収入	300,000	521,857	−221,857
年会開催事業に係る補助金・寄付金収入	0	9,500	−9,500
広報・普及事業に係る補助金・寄付金収	100,000	90,000	10,000
その他助成金収入	0	329,143	−329,143
⑦雑収入	117,800	291,739	−173,939
受け取り利息	300	236	64
引当金受取利息	700	0	700
その他の収入	116,800	291,503	−174,703
⑧引当預金取崩し収入 6）	8,190,000	1,297,896	6,892,104
事業準備引当預金取崩し収入	2,000,000	0	2,000,000
年会開催引当預金取崩し収入	1,000,000	0	1,000,000
普及書出版引当預金取崩し収入	1,000,000	0	1,000,000
研究奨励引当預金取り崩し収入	500,000	0	500,000
125周年記念事業引当預金取崩し収入	3,690,000	1,297,896	2,392,104
【事業活動収入計】	74,477,500	68,927,125	5,550,375
【前年度繰越金】	15,132,595	15,132,595	0
【収入合計】	89,610,095	84,059,720	5,550,375

科　目	2018年度予算	2018決算	差 異
Ⅱ．事業活動支出の部			
1）事業費支出 7）	59,617,100	54,123,322	5,493,778
①出版事業 8）	31,303,900	31,726,494	−422,594
a 給料手当支出	4,920,000	5,069,781	−149,781
b 賞与支給支出	1,280,000	1,363,587	−83,587
c 退職掛け金支出	230,400	230,400	0
d 法定福利費支出	1,060,000	977,937	82,063
e 会議費支出	100,000	38,735	61,265
f 旅費交通費支出	200,000	301,754	−101,754
通信運搬費支出	4,100,000	4,327,587	−227,587
h 消耗什器備品費支出	350,000	356,732	−6,732
i OA機器・システム等保守管理費、	360,000	325,161	34,839
j 消耗品費支出	100,000	300,957	−200,957
l 光熱水料費支出	260,000	260,800	−800
m 事務所賃借料支出	2,578,500	2,442,636	135,864
地質学雑誌印刷製本費支出	9,000,000	9,352,830	−352,830
News誌印刷製本費支出	3,300,000	2,956,446	343,554
k 広報誌ほか印刷製本費支出	960,000	1,127,038	−167,038
出版編集費	1,550,000	1,445,563	104,437
諸謝金支出	420,000	338,499	81,501
負担金支出	500,000	490,092	9,908
n 雑支出	35,000	19,959	15,041
②年会開催事業 9）	10,472,600	9,841,277	982,653
a 給料手当支出	1,230,000	1,267,440	−37,440
b 賞与支給支出	320,000	340,896	−20,896
c 退職掛け金支出	57,600	57,600	0
d 法定福利費支出	265,000	244,482	20,518
臨時雇賃金支出	720,000	694,125	25,875
旅費交通費支出	350,000	266,218	83,782
通信運搬費支出	500,000	460,686	39,314
機器賃借料支出	600,000	590,760	9,240
消耗品費支出	50,000	23,677	26,323
印刷製本費支出	900,000	869,378	30,622
会場賃借料支出	1,500,000	1,512,460	−12,460
会場設営・設備費支出	1,600,000	1,350,000	250,000
懇親会実施支出	1,000,000	1,049,760	−49,760
保険料支出	15,000	14,630	370

科　　目	2018年度予算	2018決算	差　異
委託費支出	550,000	417,960	132,040
雑支出	515,000	477,654	37,346
巡検実施支出	300,000	203,551	96,449
③普及事業　10)	**4,810,600**	**3,658,694**	1,151,906
a 給料手当支出	1,230,000	1,267,440	−37,440
b 賞与支給支出	320,000	340,896	−20,896
c 退職掛け金支出	57,600	57,600	0
d 法定福利費支出	265,000	244,482	20,518
e 会議費支出	20,000	19,365	635
f 旅費交通費支出	100,000	149,839	−49,839
g 通信運搬費支出	530,000	180,490	349,510
h 消耗什器備品費支出	94,000	79,267	14,733
ｉOA機器・システム等保守管理費、	100,000	72,250	27,750
j 消耗品費支出	50,000	66,442	−16,442
k 印刷製本費支出	500,000	324,744	175,256
臨時雇賃金支出	500,000	0	500,000
会場賃借料支出	250,000	87,430	162,570
普及イベント実施支出	30,000	88,820	−58,820
広告宣伝費	160,000	160,000	0
保険料支出	10,000	7,400	2,600
諸謝金支出	70,000	77,959	−7,959
負担金支出	500,000	400,000	100,000
n 雑支出	24,000	34,270	−10,270
④支部・部会等活動事業　11)	**2,640,000**	**2,122,355**	**517,645**
旅費交通費支出	220,000	226,662	−6,662
通信運搬費支出	50,000	63,767	−13,767
機器賃借料支出	40,000	0	40,000
消耗品費支出	20,000	570	19,430
印刷製本費支出	120,000	79,150	40,850
臨時雇い賃金	170,000	225,350	−55,350
会場賃借料支出	100,000	171,250	−71,250
イベント実施支出	1,500,000	1,130,685	369,315
保険料支出	50,000	26,100	23,900
諸謝金支出	250,000	146,961	103,039
負担金支出	70,000	20,000	50,000
雑支出	50,000	31,860	18,140
⑤125周年記念事業支出　12)	**7,960,000**	**5,627,099**	**2,332,901**
広報宣伝費	30,000	50,000	−20,000
出版費	3,000,000	3,029,191	−29,191
記念品(祝賀会等)	1,800,000	1,257,811	542,189
印刷費	1,200,000	108,026	1,091,974
会議・交通費	1,200,000	1,079,662	120,338
通信費	30,000	21,411	8,589
支部事業費	600,000	21,644	578,356
雑支出	100,000	59,354	40,646
⑥研究奨励事業	**830,000**	**936,791**	−106,791
賞授与支出	350,000	350,000	0
雑支出	480,000	586,791	−106,791
⑦特別事業　13)	**1,600,000**	**210,612**	**1,389,388**
国際交流等事業費	1,500,000	210,612	1,289,388
緊急災害調査事業費	100,000	0	100,000
2)管理費　14)	**14,490,400**	**14,058,006**	**432,394**
a 給料手当支出	4,920,000	5,069,806	−149,806
b 賞与支給支出	1,280,000	1,363,590	−83,590
c 退職金掛け金支出	230,400	230,400	0

科　　目	2018年度予算	2018決算	差　異
d 法定福利費支出	1,060,000	977,952	82,048
e 会議費支出	160,000	135,585	24,415
f 旅費交通費支出	720,000	875,433	−155,433
g 通信運搬費支出	800,000	576,975	223,025
h 消耗什器備品費支出	350,000	356,754	−6,754
ｉOA機器・システム等保守管理費	370,000	325,184	44,816
j 消耗品費支出	600,000	315,589	284,411
k印刷製本費支出	140,000	142,199	−2,199
l 光熱水料費支出	270,000	260,805	9,195
m 事務所賃借料支出	2,450,000	2,442,636	7,364
諸謝金支出	550,000	518,400	31,600
租税公課支出	10,000	10,600	−600
負担金支出	280,000	284,130	−4,130
n 雑支出	300,000	171,968	128,032
3)法人税等支出	**70,000**	**70,000**	0
4)引当預金繰入支出　15)	**300,000**	**502,166**	−202,166
繰入支出	300,000	502,166	−202,166
【事業活動支出計】	**74,477,500**	**68,753,494**	**5,724,006**
【事業活動収支差額】	**0**	**173,631**	**−173,631**
次期繰越収支差額	**15,132,595**	**15,306,226**	**−173,631**

＜注＞2018年度決算

1) 会員は依然減少傾向。　過年度分支払も含まれる。
2) 雑誌等の購読は減少しているが、特集号による印刷負担金収入増加。
3) 大会2日目以降は北海道胆振東部地震の発生により参加者減、収入も減。
4) 前受の寄付金327万円を収入としたが、その後寄付金の伸びはなく、祝賀会参加費も予算より減。
5) 学会名義の出版物印税今年は主に地方地質誌の印税、フォトコン協賛金など。
6) 全体の収支が概ね良好のため、取り崩しは125記念事業引当金のみとする。
7) ①～③の各事業費の管理費(a～n)は2)管理費支出との案分比例+各事業固有の費用。
8) 地質学雑誌の125周年記念特集号を7号発行。この経費の一部210万円を125周年記念事業費から補てん。
9) 案分比例の管理費(a～d)を除き、収支は65,172円プラス。
10) 情報展等の科研費に代わり予算化したが、地震ですべて中止。地学オリンピック協賛金10万円の減額。
11) 各支部の事業経費、部会の交通費等。
12) 当該引当金と目的に適った他の引当金の取り崩しを予定したが、全体的に支出が抑えられたので
　他の名目からの支出はなし。
13) 125周年記念事業の交流学会招待との連動予算は、地震のため交流行事も中止となった。韓国地質学会、
　タイ地質学会との交流経費のみ。
14)個々の科目には増減があるが全体としては概ね予算内に収まった。
15) 普及書出版印税寄付から50万円を繰入。その他は定期預金利子。

収 支 計 算 書

（自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　　目	予 算 額	決 算 額	差　異	備　考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	2,500	2,542	△ 42	
特定資産運用収入	2,200	2,810	△ 610	
会費収入	41,205,000	41,652,650	△ 447,650	
事業収入				
出版事業収入	9,370,000	10,658,565	△ 1,288,565	
年会開催事業収入	8,600,000	7,996,031	603,969	
普及事業収入	520,000	438,682	81,318	
支部・部会等活動事業収入	1,800,000	1,301,350	498,650	
125周年記念事業費収入	4,270,000	4,334,360	△ 64,360	
事業収入計	24,560,000	24,728,988	△ 168,988	
補助金・寄付金等収入	400,000	950,500	△ 550,500	
雑収入	117,800	291,739	△ 173,939	
事業活動収入計	66,287,500	67,629,229	△ 1,341,729	
2. 事業活動支出				
事業費支出				
出版事業費	19,830,000	20,192,177	△ 362,177	
年会開催事業費	8,600,000	7,930,859	669,141	
普及事業費	2,044,000	1,180,623	863,377	
支部・部会等活動事業費	2,640,000	2,122,355	517,645	
研究奨励事業費	830,000	936,791	△ 106,791	
125周年記念事業費	7,960,000	5,627,099	2,332,901	
特別事業費	1,600,000	210,612	1,389,388	
事業管理費(注)	16,113,100	15,922,806	190,294	
事業費支出計	59,617,100	54,123,322	5,493,778	
管理費支出				
人件費	7,490,400	7,641,748	△ 151,348	
旅費交通費	720,000	875,433	△ 155,433	
事務所賃借料	2,450,000	2,442,636	7,364	
事務諸費	3,530,000	2,926,221	603,779	
雑費	300,000	171,968	128,032	
法人税等支出	70,000	70,000	0	
管理費支出計	14,560,400	14,128,006	432,394	
事業活動支出計	74,177,500	68,251,328	5,926,172	
事業活動収支差額額	△ 7,890,000	△ 622,099	△ 7,267,901	
Ⅱ. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
事業準備引当預金取崩収入	2,000,000	0	2,000,000	
年会開催費引当預金取崩収入	1,000,000	0	1,000,000	
普及書出版引当預金取崩収入	1,000,000	0	1,000,000	
研究奨励引当預金取崩収入	500,000	0	500,000	
125周年記念事業引当預金取崩収入	3,690,000	1,297,896	2,392,104	
投資活動収入計	8,190,000	1,297,896	6,892,104	
2. 投資活動支出				
退職手当引当預金繰入支出	0	688	△ 688	
年会開催補助費引当預金繰入支出	0	607	△ 607	
普及書出版引当預金繰入支出	300,000	500,516	△ 200,516	
研究奨励引当預金繰入支出	0	131	△ 131	
125周年記念事業引当預金繰入支出	0	224	△ 224	
投資活動支出計	300,000	502,166	△ 202,166	
投資活動収支差額	7,890,000	795,730	7,094,270	
Ⅲ. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	173,631	△ 173,631	
前期繰越収支差額	15,132,595	15,132,595	0	
次期繰越収支差額	0	15,306,226	△ 173,631	

（注） 1. 各事業ごとの「事業管理費」を、抜き出して一括して表示している。

計算書類に対する注記（2018年度）

1．重要な会計方針
公益法人会計基準（平成16年10月）を採用している．

1）引当金の計上について
- 事業準備引当金：将来的な事業，前年度未完事業，会員名簿出版，大規模災害調査・研究などのために引当。
- 年会開催補助費引当金：年会事業収支の余剰金を不足が生じた場合に備え引当。
- 退職手当引当金：期末要支給額のうち、中退共掛け金を考慮した見込み額を引当。
  ＊ 中退共の掛け金積立額:今期末で4,007,650円(利子含む2名分)。
- 普及書出版引当金：地質学会名で出版社から刊行した出版物の著者からの印税寄付金を以後の普及書出版に備え引当。
- 125周年記念事業準備引当金：2018年度にて事業終了。引当金一部取り崩し後の残金。取り崩しの予定。
- 研究奨励引当金：会員の研究奨励のために会員からの寄付金および必要に応じて引当。

2）消費税等の会計処理
税込方式によっている．

2．基本財産の残高状況は次のとおりである。

（単位円）

科　目	期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
預　金	30,000,000	0	0	30,000,000
合計（基本財産）	30,000,000	0	0	30,000,000

収支計算書に対する注記（2018年度）

1．資金の範囲について
資金の範囲には現金，預金，未収金，仮払金，未払金，預り金，前受金を含める。

期末残高は下記に示すとおりである。

2．次期繰り越し収支差額の内容は、次のとおりである。

（単位円）

科　目	前期末残高	当期末残高
現金（切手残高含	194,629	54,733
預　金	49,683,526	47,983,559
仮払金	193,391	142,457
立替金	1,827,904	0
合　計	51,899,450	48,180,749
未払金	1,660,888	1,534,633
預り金	526,267	496,528
前受金	34,579,700	30,843,362
合　計	36,766,855	32,874,523
次期繰越収支差額	15,132,595	15,306,226

財　産　目　録

2019年3月31日現在

（単位：円）

科　目	金額		
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金　（現金：29,561円、切手25,172円）	54,733		
預貯金	(47,983,559)		
三井住友銀行神田駅前支店(普通)1711424	18,521,915		
みずほ銀行神田駅前(普通) 2229416	9,376,880		
三菱東京UFJ銀行神田駅前(普通) 0108667	2,510,270		
三菱東京UFJ銀行神田駅前（定期）0022615-4	243,188		
ゆうちょ銀行振替口座　00140-8-28067	17,002,161		
ゆうちょ銀行(普通) 62073562	329,145		
仮払金（労働保険料2018年度概算払い）	142,457		
流動資産合計		48,180,749	
2．固定資産			
（1）基本財産			
預金（みずほ銀行神田駅前支店（定期）6558120-1,2,5,6）	30,000,000		
基本財産合計	30,000,000		
（2）その他の固定資産			
敷金・保証金(井桁ビル預け)	2,000,000		
特定資産	(34,631,566)		
事業準備引当預金（みずほ銀行神田駅前支店（定期）6558120-9）	7,600,000		
退職手当引当預金（三菱東京UFJ銀行神田駅前支店（定期）0022615-1,6,7）	8,131,136		
年会開催補助費引当預金（三菱東京UFJ銀行神田駅前支店（定期）0022615-2、一部普通）	7,718,036		
普及書出版引当預金（三菱東京UFJ銀行神田駅前支店（定期）0022615-3,9、一部普通）	7,235,337		
研究奨励引当預金（三菱東京UFJ銀行神田駅前支店（定期）0022615-8）	1,547,057		
125周年記念事業引当預金（三菱東京UFJ銀行神田駅前支店（定期）0022615-4）	2,400,000		
その他の固定資産合計	36,631,566		
固定資産合計		66,631,566	
資産合計			114,812,315
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	1,534,633		
預り金（社保料2月・3月分他）	496,528		
前受金（2019年4月以降の会費）	30,843,362		
流動負債合計		32,874,523	
2．固定負債			
引当金	(34,631,566)		
事業準備引当金	7,600,000		
退職手当引当金	8,131,136		
年会開催補助費引当金	7,718,036		
普及書出版引当金	7,235,337		
研究奨励引当金	1,547,057		
125周年記念事業引当金	2,400,000		
固定負債合計		34,631,566	
負債合計			67,506,089
正味財産			47,306,226

貸　借　対　照　表

2019年3月31日現在

(単位:円)

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現　金	54,733	194,629	△ 139,896
預　金	47,983,559	49,683,526	△ 1,699,967
仮払金	142,457	193,391	△ 50,934
立替金	0	1,827,904	△ 1,827,904
流動資産合計	48,180,749	51,899,450	△ 3,718,701
2．固定資産			
（1）基本財産			
預　金	30,000,000	30,000,000	0
基本財産合計	30,000,000	30,000,000	0
(2) その他の固定資産			
敷金・保証金	2,000,000	2,000,000	0
特定資産	34,631,566	35,427,296	△ 795,730
事業準備引当預金	7,600,000	7,600,000	0
退職手当引当預金	8,131,136	8,130,448	688
年会開催補助費引当預金	7,718,036	7,717,429	607
普及書出版引当預金	7,235,337	6,734,821	500,516
研究奨励引当預金	1,547,057	1,546,926	131
125周年記念事業引当金	2,400,000	3,697,672	△ 1,297,672
その他の固定資産合計	36,631,566	37,427,296	△ 795,730
固定資産合計	66,631,566	67,427,296	△ 795,730
資産合計	114,812,315	119,326,746	△ 4,514,431
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	1,534,633	1,660,888	△ 126,255
預り金	496,528	526,267	△ 29,739
前受金	30,843,362	34,579,700	△ 3,736,338
流動負債合計	32,874,523	36,766,855	△ 3,766,077
2．固定負債			
引当金			
事業準備引当金	7,600,000	7,600,000	0
退職手当引当金	8,131,136	8,130,448	688
年会開催補助費引当金	7,718,036	7,717,429	607
普及書出版引当金	7,235,337	6,734,821	500,516
研究奨励引当金	1,547,057	1,546,926	131
125周年記念事業引当金	2,400,000	3,697,672	△ 1,297,672
固定負債合計	34,631,566	35,427,296	△ 795,730
負債合計	67,506,089	72,194,151	△ 4,561,807
Ⅲ　正味財産の部			
1.　指定正味財産	0	0	0
2.　一般正味財産	47,306,226	47,132,595	173,631
正味財産合計	47,306,226	47,132,595	173,631
負債及び正味財産合計	114,812,315	119,326,746	△ 4,388,176

正　味　財　産　増　減　計　算　書

（自　2018年　4 月　1 日　至　2019年　3 月 31 日）

(単位：円)

科　　目	当　年　度	前　年　度	増　減	備　考
Ⅰ.一般正味財産増減の部				
1.経常増減の部				
(1)経常収益				
基本財産運用収入	2,542	2,542	0	
特定資産運用収入	2,810	2,166	644	
会費収入	41,652,650	42,366,650	△ 714,000	
事業収入				
出版事業収入	10,658,565	10,448,494	210,071	
年会開催事業収入	7,996,031	7,632,716	363,315	
普及事業収入	438,682	482,383	△ 43,701	
支部・部会等活動事業収入	1,301,350	1,818,689	△ 517,339	
125周年記念事業収入	4,334,360	2,523,960	1,810,400	
事業収入計	24,728,988	22,906,242	1,822,746	
補助金・寄付金等収入	950,500	1,074,906	△ 124,406	
雑収入	291,739	113,584	178,155	
経常収益計	67,629,229	66,466,090	1,163,139	
(2)経常費用				
事業費				
出版事業費	20,192,177	21,588,995	△ 1,396,818	
年会開催事業費	7,930,859	7,353,643	577,216	
普及事業費	1,180,623	1,615,263	△ 434,640	
支部・部会等活動事業費	2,122,355	2,145,726	△ 23,371	
研究奨励事業費	936,791	772,085	164,706	
125周年記念事業費	5,627,099	2,558,807	3,068,292	
特別事業費	210,612	157,500	53,112	
事業管理費	15,922,806	15,603,357	319,449	
事業費計	54,123,322	51,795,376	2,327,946	
管理費				
人件費	7,641,748	7,455,456	186,292	
旅費交通費	875,433	721,859	153,574	
事務所賃借料	2,442,636	2,848,722	△ 406,086	
事務諸費	2,926,221	4,969,844	△ 2,043,623	
雑費	171,968	822,630	△ 650,662	
法人税等支出	70,000	0	70,000	
管理費計	14,128,006	16,818,511	△ 2,690,505	
経常費用計	68,251,328	68,613,887	△ 362,559	
当期経常増減額	△ 622,099	△ 2,147,797	1,525,698	

科　　目	当　年　度	前　年　度	増　　減	備　　考
2. 経常外増減の部				
(1)経常外収益				
125周年記念事業引当金取崩額	1,297,896	0	1,297,896	
経常外収益計	1,297,896	0	1,297,896	
(2)経常外費用				
退職手当引当金繰入額	688	688	0	
年会開催補助費引当金繰入額	607	550,607	△ 550,000	
普及書出版引当金繰入額	500,516	550,516	△ 50,000	
研究奨励引当金繰入額	131	131	0	
125周年記念事業準備引当金繰入額	224	500,224	△ 500,000	
経常外費用計	502,166	1,602,166	△ 1,100,000	
当期経常外増減額	795,730	△ 1,602,166	2,397,896	
当期一般正味財産増減額	173,631	△ 3,749,963	3,923,594	
一般正味財産期首残高	47,132,595	50,882,558	△ 3,749,963	
一般正味財産期末残高	47,306,226	47,132,595	173,631	
Ⅱ. 指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
Ⅲ. 正味財産期末残高	47,306,226	47,132,595	173,631	

会計監査報告書

一般社団法人日本地質学会
会長　松田　博貴　殿

2019年5月14日

監事　山本　正司

監事　藤本光一郎

私たち監査 2 名は、2018 年度一般社団法人日本地質学会会計について、関係書類に基づき監査いたしました。その結果について、以下のとおりご報告いたします。

1．監査日
2019年5月14日

2．監査対象
2018年度（2018年4月1日～2019年3月31日）会計

3．監査方法
当該事業年度における会計について必要に応じて説明を受け、計算書類・預金通帳などを確認いたしました。いずれも適正、正確に処理されていることを認めます。

4．監査意見
当年度は北海道での地震による影響を受け、125 周年事業や年会事業の縮小があった。しかしながら、かろうじて単年度収支のバランスを保てた。来年度以降の単年度収支は会員減少の影響を受け一層厳しくなることが予想されるので、運営についてはより適切に対応されたい。

一般社団法人日本地質学会2019年度収支予算案

（2019年4月1日～2020年3月31日）

科　　目	2018年度予算	2019度予算案	前年度予算との増減
Ⅰ事業活動収入の部			
1.事業活動収入			
1）基本財産運用収入	2,500	2,500	0
基本財産利息収入	2,500	2,500	0
2）特定資産運用収入	2,200	2,700	500
特定資産運用収入	2,200	2,700	500
3）会費収入　1）	41,205,000	40,050,000	−1,155,000
正会員会費収入	38,000,000	37,000,000	−1,000,000
正会員院生割引会費収入	1,420,000	1,400,000	−20,000
正会員学生割引会費収入	85,000	50,000	−35,000
賛助会員会費収入	1,700,000	1,600,000	−100,000
4）事業収入	33,267,800	23,340,300	−9,927,500
①出版事業収入　2）	9,370,000	8,610,000	−760,000
雑誌販売収入	2,200,000	2,000,000	−200,000
雑誌印刷負担金収入	2,800,000	2,000,000	−800,000
別刷収入	700,000	500,000	−200,000
広報誌販売収入	20,000	10,000	−10,000
論集収入	40,000	20,000	−20,000
リーフレット販売収入	600,000	600,000	0
バックナンバー等売上収入	10,000	10,000	0
その他出版物収入	50,000	50,000	0
広告料収入	400,000	400,000	0
広報誌企画料	450,000	600,000	150,000
アイランドアーク編集費・関連収入	1,900,000	2,200,000	300,000
雑収入	200,000	220,000	20,000
②年会開催事業収入　3）	8,600,000	7,900,000	−700,000
参加登録費収入	6,000,000	5,700,000	−300,000
懇親会参加費収入	1,000,000	1,000,000	0
資料等販売収入(講演要旨)	200,000	150,000	−50,000
展示収入	900,000	700,000	−200,000
広告収入	300,000	250,000	−50,000
雑収入	200,000	100,000	−100,000
③普及事業収入	520,000	510,000	−10,000
普及イベント参加費収入	50,000	100,000	50,000
普及資料等販売収入	450,000	400,000	−50,000
雑収入	20,000	10,000	−10,000
④支部・部会等活動事業収入	1,800,000	1,600,000	−200,000
イベント参加費収入	1,600,000	1,450,000	−150,000
資料等販売収入	100,000	50,000	−50,000
負担金収入	50,000	60,000	10,000
雑収入	50,000	40,000	−10,000
⑤125周年記念事業収入	4,270,000	0	−4,270,000
125周年記念事業寄付金	3,770,000	0	−3,770,000
雑収入	500,000	0	−500,000
⑥補助金・寄付金等収入　4）	400,000	400,000	0
出版事業に係る補助金・寄付金収入	300,000	300,000	0
広報・普及事業に係る補助金・寄付金収	100,000	100,000	0
⑦雑収入	117,800	270,300	152,500
受け取り利息	300	300	0
引当金受取利息	700	0	−700
その他の収入	116,800	270,000	153,200
⑧引当預金取崩し収入　5）	8,190,000	4,050,000	−4,140,000
事業準備引当預金取崩し収入	2,000,000	1,500,000	−500,000
年会開催引当預金取崩し収入	1,000,000	1,000,000	0
普及書出版引当預金取崩し収入	1,000,000	1,000,000	0
研究奨励引当預金取り崩し収入	500,000	550,000	50,000
125周年記念事業引当預金取崩し収入	3,690,000	0	−3,690,000
【事業活動収入計】	74,477,500	63,395,500	−11,082,000
【前年度繰越金】	15,132,595	15,306,226	173,631
【収入合計】	89,610,095	78,701,726	−10,908,369

科　　目	2018年度予算	2019度予算案	前年度予算との増減
Ⅱ．事業活動支出の部			
1）事業費支出　6）	59,617,100	47,464,400	−12,152,700
①出版事業　7）	31,303,900	30,689,600	−614,300
a 給料手当支出	4,920,000	4,800,000	−120,000
b 賞与支給支出	1,280,000	1,120,000	−160,000
c 退職掛け金支出	230,400	249,600	19,200
d 法定福利費支出	1,060,000	1,040,000	−20,000
e 会議費支出	100,000	50,000	−50,000
f 旅費交通費支出	200,000	300,000	100,000
通信運搬費支出	4,100,000	3,800,000	−300,000
h 消耗什器備品費支出	350,000	517,500	167,500
i OA機器・システム等保守管理費、	360,000	337,500	−22,500
j 消耗品費支出	100,000	315,000	215,000
l 光熱水料費支出	260,000	251,662	−8,338
m 事務所賃借料支出	2,578,500	2,578,338	−162
地質学雑誌印刷製本費支出	9,000,000	9,200,000	200,000
News誌印刷製本費支出	3,300,000	3,000,000	−300,000
k 広報誌ほか印刷製本費支出	960,000	1,150,000	190,000
出版編集費	1,550,000	1,100,000	−450,000
諸謝金支出	420,000	350,000	−70,000
負担金支出	500,000	500,000	0
n 雑支出	35,000	30,000	−5,000
②年会開催事業　8）	10,472,600	9,702,400	−770,200
a 給料手当支出	1,230,000	1,200,000	−30,000
b 賞与支給支出	320,000	280,000	−40,000
c 退職掛け金支出	57,600	62,400	4,800
d 法定福利費支出	265,000	260,000	−5,000
臨時雇賃金支出	720,000	720,000	0
旅費交通費支出	350,000	300,000	−50,000
通信運搬費支出	500,000	500,000	0
機器賃借料支出	600,000	620,000	20,000
消耗品費支出	50,000	30,000	−20,000

科　　目	2018年度予算	2019度予算案	前年度予算との増減
印刷製本費支出	900,000	1,200,000	300,000
会場賃借料支出	1,500,000	400,000	-1,100,000
会場設営・設備費支出	1,600,000	1,600,000	0
懇親会実施支出	1,000,000	1,000,000	0
保険料支出	15,000	15,000	0
委託費支出	550,000	600,000	50,000
雑支出	515,000	515,000	0
巡検実施支出	300,000	400,000	100,000
③普及事業 9)	**4,810,600**	**3,447,400**	-1,363,200
a 給料手当支出	1,230,000	1,200,000	-30,000
b 賞与支給支出	320,000	280,000	-40,000
c 退職掛け金支出	57,600	62,400	4,800
d 法定福利費支出	265,000	260,000	-5,000
e 会議費支出	20,000	25,000	5,000
f 旅費交通費支出	100,000	120,000	20,000
g 通信運搬費支出	530,000	160,000	-370,000
h 消耗什器備品費支出	94,000	115,000	21,000
ＩOA機器・システム等保守管理費、	100,000	75,000	-25,000
j 消耗品費支出	50,000	70,000	20,000
k 印刷製本費支出	500,000	140,000	-360,000
臨時雇賃金支出	500,000	30,000	-470,000
会場賃借料支出	250,000	100,000	-150,000
普及イベント実施支出	30,000	150,000	120,000
広告宣伝費	160,000	160,000	0
保険料支出	10,000	10,000	0
諸謝金支出	70,000	50,000	-20,000
負担金支出	500,000	400,000	-100,000
n 雑支出	24,000	40,000	16,000
④支部・部会等活動事業 10)	**2,640,000**	**2,325,000**	-315,000
旅費交通費支出	220,000	170,000	-50,000
通信運搬費支出	50,000	70,000	20,000
機器賃借料支出	40,000	5,000	-35,000
消耗品費支出	20,000	20,000	0
印刷製本費支出	120,000	100,000	-20,000
臨時雇い賃金	170,000	150,000	-20,000
会場賃借料支出	100,000	160,000	60,000
イベント実施支出	1,500,000	1,350,000	-150,000
保険料支出	50,000	40,000	-10,000
諸謝金支出	250,000	200,000	-50,000
負担金支出	70,000	20,000	-50,000
雑支出	50,000	40,000	-10,000
⑤125周年記念事業支出 11)	**7,960,000**	**0**	-7,960,000
広報宣伝費	30,000	0	-30,000
出版費	3,000,000	0	-3,000,000
記念品(祝賀会等)	1,800,000	0	-1,800,000
印刷費	1,200,000	0	-1,200,000
会議・交通費	1,200,000	0	-1,200,000
通信費	30,000	0	-30,000
支部事業費	600,000	0	-600,000

科　　目	2018年度予算	2019度予算案	前年度予算との増減
雑支出	100,000	0	-100,000
⑥研究奨励事業	**830,000**	**1,050,000**	220,000
賞授与支出	350,000	350,000	0
雑支出	480,000	700,000	220,000
⑦特別事業 12)	**1,600,000**	**250,000**	-1,350,000
国際交流等事業費	1,500,000	150,000	-1,350,000
緊急災害調査事業費	100,000	100,000	0
2)管理費 13)	**14,490,400**	**15,561,100**	1,070,700
a 給料手当支出	4,920,000	4,800,000	-120,000
b 賞与支給支出	1,280,000	1,120,000	-160,000
c 退職金掛け金支出	230,400	249,600	19,200
d 法定福利費支出	1,060,000	1,040,000	-20,000
e 会議費支出	160,000	140,000	-20,000
f 旅費交通費支出	720,000	800,000	80,000
g 通信運搬費支出	800,000	1,020,000	220,000
h 消耗什器備品費支出	350,000	517,500	167,500
ＩOA機器・システム等保守管理費	370,000	337,500	-32,500
j 消耗品費支出	600,000	315,000	-285,000
k印刷製本費支出	140,000	1,200,000	1,060,000
l 光熱水料費支出	270,000	251,662	-18,338
m 事務所賃借料支出	2,450,000	2,578,338	128,338
諸謝金支出	550,000	518,400	-31,600
租税公課支出	10,000	5,000	-5,000
負担金支出	280,000	300,000	20,000
n 雑支出	300,000	368,100	68,100
3)法人税等支出	**70,000**	**70,000**	0
4)引当預金繰入支出 14)	**300,000**	**300,000**	0
繰入支出	300,000	300,000	0
【事業活動支出計】	**74,477,500**	**63, 395, 500**	-11,082,000
【事業活動収支差額】	**0**	**0**	0
次期繰越収支差額	**15,132,595**	**15, 306, 226**	173,631

＜注＞2019年度予算案

1) 会員は依然減少傾向、前年よりやや減額。
2) 雑誌等の購読も減少傾向である。本年は特集号終了に伴い印刷負担金収入も減少の見込み。
3) 年会参加費変更なし、札幌の実績並み、他からの助成金予定なし。
11) 125周年事業は終了につき収支ともに今年度予算立てなし。
4) 学会名義による出版物印税の寄付収入、フォトコン協賛金など。
5) 目的に応じて引当準備金の取崩しを予定。
6) ①～③の各事業費の管理費(a～n)は、2)管理費支出との案分比例+各事業固有の費用。
125周年記念事業終了につき、関連科目は全て減額。
7) 地質学雑誌の125周年記念特集号終了により全体にページダウンを予想、ただし実質的印刷費は昨年並みとした。
8) 年会支出のうち、案分比例の管理費(a～d)を除き、収支は相殺の予算とする。
前年度は情報展、市民行事の経費を予算化したが。今年は科研費の採択によりその分を除く。
9) 年会での普及事業の経費は科研費によるので予算案には特に考慮なし。
10) 各支部、部会の事業予算を勘案した。
12) 国際交流費による交流学会との往来および行事の予定はとくになし。
13) 管理費のうち今年度予算では選挙、名簿作成に関する費用(通信費・印刷費)を増額。
14) 普及書出版印税寄付を繰入予定。

永年会員（50年会員）顕彰38名
1969年入会

石川政憲

猪俣道也

岩田　修

大木公彦

岡田正明

田結庄良昭

田中　剛

星野光雄

増田富士雄

村松憲一

森山義博

両角芳郎

吉松敏隆

矢口良一

庄司勝信

田中伸廣

樋口茂生

青島睦治，足立　守，久保和也，小林文夫，佐藤博明，佐藤光男，下山正一，滝田良基，田中　隆，田村幹夫，塚田有一郎，塚原弘昭，手塚恒人，照井一明，鳥海光弘，馬場勝良，藤本幸雄，宮田隆夫，山根一夫，山本哲也，吉田武義

（順不同，敬称略）

2019年度
名誉会員候補者推薦理由

一般社団法人日本地質学会
名誉会員推薦委員会　委員長　佐々木和彦

2019年度名誉会員候補者として，小玉喜三郎会員を選出いたしました．推薦理由は以下のとおりです．

小玉喜三郎会員（1942年8月25日生まれ，76歳）

小玉喜三郎会員は，1969年通商産業省工業技術院地質調査所燃料部石油課に入所後，神奈川県城ヶ島の海食台に露出する中新世の三崎累層中の小断層の詳細な解析を行い，断層の活動時代の分類とそれぞれの断層の特徴を明らかにして，それを形成した応力場の復元に成功した．この研究により，日本地質学会研究奨励金（現在の研究奨励賞）を受賞し，この成果はその後の地質調査結果を加えて，5万分の1地質図幅「三崎」として公表された．さらに，堆積作用と構造運動を一体化させた地質モデルを構築し，箱形褶曲による盆地形成シミュレーションを用いて，天然ガスを含む房総半島や東京湾周辺に分布する上総層群堆積盆の解析を実施した．このことは，資源ポテンシャル評価のために論理的な解析が重要であることを示したものといえる．

1989年以降は地質調査所の管理職を歴任し，研究所の研究企画，予算配分，実施体制の整備，研究所経営の根幹をなす方針策定などの重要な職務を務めた．1997年には地質調査所の所長に就任し，国から示された通商産業省所管の研究所の統合，独立行政法人化の方針に沿って，法人化に向けた検討を主導した．そして産業技術総合研究所という新たな総合研究所のもとで社会的要請に応えるとともに，地質情報整備と国民へのサービスの体制を向上させるための基本設計を行った．法人化への改革にあたっては，産業技術総合研究所での地質関連研究部門の設置と共に，地質調査所の研究資産継承の一元的窓口としての地質調査総合センター（Geological Survey of Japan ）の設置に尽力した．

これらの経済産業行政にかかわる多大な貢献により，2013年には瑞宝中綬章を受章した．

2007年から3年間，国際連合の国際惑星地球年に対応する日本の推進団体の会長として，地質科学の社会的重要性を国内外にアピールするとともに，アウトリーチ活動を重要視し，日本におけるジオパークや地学オリンピックの活動が開始されることを支援した．

日本地質学会の活動においては，1988年から1997年の10年間5期連続で評議員を務め，このうち1988，1989，1990，1992，1993，1994及び1996年の7期の長きにわたり，第二庶務委員長をはじめとする執行委員を歴任して，学会運営に多大な貢献をした．

2016年には会員を50年続けたことにより永年会員顕彰を受け，日本地質学会創立125周年にあたる2018年には，地質学の社会的認知拡大に貢献したことにより，日本地質学会125周年記念特別表彰に輝いた．

以上のように，小玉喜三郎会員は学術研究のみならず，研究行政においても日本の地質学の発展に多大な功績を残しており，あわせて日本地質学会の運営についても多大な貢献を行った．これらの功績や貢献の内容は，日本地質学会の名誉会員として相応しいものであると判断してここに推薦するものである．

2019年度
日本地質学会各賞授賞理由

各賞選考委員会委員長　竹内　誠

2019年度各賞の授賞候補者，授賞候補論文および授賞理由について，下記の通り報告いたします．

日本地質学会賞

受賞者：多田隆治 会員（東京大学大学院理学系研究科）

対象研究テーマ：精密な層序ならびに堆積物分析に基づく環境変動史解明

多田隆治会員は，これまで長年にわたり，詳細な野外調査ならびにコア観察に基づき緻密な岩相層序を確立し，それを基礎に，堆積物の物性・粒度・鉱物・元素組成の時代変遷を精密に分析・解析することにより，地球表層の環境変動史解明に関わる数々の発見と洞察に満ちた仮説を提示してきた．中でも，珪質堆積物の続成過程の理解を基に，日本海第三紀珪質岩の堆積リズムがミランコビッチサイクルを反映していることの発見や，日本海の第四紀明暗層の堆積がDansgaard-Oeschgerサイクルに対応していることを初めて見出し，日本海の海洋環境が東アジアモンスーンと共に大きく変動して来たことを明らかにした功績は大きい．また日本海への黄砂供給量が東アジアの乾湿を反映し，その供給源の変動は東アジアとグリーランドの気候テレコネクションによる可能性を指摘した．このように，多田会員による新生代の海洋および陸上地質についての詳細な堆積学的検討と，それに基づく汎世界的な気候変動との関連性に関する検討は，地球環境変動史の解明に大きく貢献すると共に，その研究手法は現在の地球環境変動史解析の基本となっている．さらに，白亜紀—古第三紀境界における隕石衝突に伴うキューバ津波イベントの規模について，精密な岩相層序と堆積物の物性解析に基づいて定量的評価を行うなど，この分野でも大きな功績を挙げた．

多田会員は，研究のみならず教育面においても，精密層序確立の重要性やその客観的な解析手法を多くの研究者や学生たちに惜しみなく伝え，環境変動に関わる地質学分野の裾野を拡げることに貢献してきた．さらにこれらの功績に加え，IODPやPAGES-SSCの国際委員，IGCP476・IGCP581の共同代表，PEPS誌やPaleoceanography誌の副編集長などを務め，環境変動史研究を通した国際的な地質学コミュニティに対し貢献すると共に，我が国の地質学の国際的発展に中心的な役割を担って来た．近年も，2013年のIODP日本海航海とその後の国際共同研究，2014年以降のAustralasian tektitesの隕石衝突サイトに関わるインドシナ調査など，国際的な研究協力や交流関係を発展させてきている．

以上のように，多田隆治会員が日本の地質学の発展に果たしてきた多岐にわたる業績はきわめて大きく，日本地質学会賞に推薦する．

日本地質学会国際賞

受賞者：Robert J. Stern 氏（テキサス大学ダラス校）

対象研究テーマ：島弧—海溝系およびプレートテクトニクスの研究

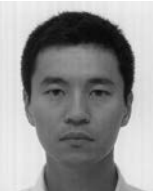
米国，テキサス大学ダラス校のRobert J. Stern教授は野外地質学，岩石学，地球化学をベースとした島弧—海溝系のテクトニクスの世界的権威として有名である．Scopus（2019年3月14日）によると論文数は270，被引用数は15534である．Stern氏は1979年カリフォルニア大学サンディエゴ校（スクリプス海洋研究所）にて学位取得後，カーネギー研究所の博士研究員を経て1982年テキサス大学ダラス校に所属し現在に至る．この間米国地質学会（1993年）および米国地球物理学連合（2017年）よりフェローの称号を授与されている．学術誌の編集への貢献も顕著で，多くの国際誌の編集委員を歴任後，現在はInternational Geology Review誌の編集長として手腕を発揮している．

北マリアナ弧のアグリハン（Agrigan）火山の火山地質学・岩石学（Stern, 1978）からスタートしたStern氏の研究はやがて伊豆-小笠原-マリアナ弧（IBM弧）全体に広がり，共同研究者とともに岩石学，地球化学，テクトニクスに関する数多くの研究成果を公表した（例えば，Bloomer et al., 1989; Lin et al., 1989; Stern & Bloomer, 1992）．またそれらを通し，島弧-海溝系の形成に関する数多くのインパクトの高い総括的論文を発表した（例えば，Stern, 2002, 2004）．その過程でIBM弧で活躍して来た日本人科学者と交流し，共同研究が2000年代に入って急速に増えている（例えば，Kimura et al., 2005; Tatsumi & Stern, 2006; Ishizuka et al., 2006, 2014; Stern et al., 2012, 2013, 2014, 2016）．Stern氏はパンアフリカ帯の形成などの原生代のテクトニクスの研究でも極めて著名である（例えば，Stern, 1994）．

Stern氏の一連の研究は，日本列島の理解を大きく高めたのみならず，共同研究を通じ日本人科学者の向上を推進してきたものとして高く評価できる．さらに，Island Arc誌のAssociate editorを長年勤め同誌の国際誌としての地位向上を推進し，ODP-IODPにおいても日本人研究者とともに掘削計画の策定や提案を行うなどの貢献があった．

こうしたRobert J. Stern教授の業績と日本地質学界への多大な貢献に鑑み，同氏を日本地質学会国際賞候補者として推薦する．

日本地質学会小澤儀明賞



受賞者：齋藤誠史 会員（スイス，ローザンヌ大学）

対象研究テーマ：古生代末の絶滅事件と特異な還元海洋環境の出現に関する研究

齋藤誠史会員は，野外地質調査と室内分析の両方を着実に行う高い能力を備え，それを実証する質の高い論文を公表すると共に，国際学会においても多数の口頭発表を行っている．齋藤会員の研究テーマは，古生代末に起きた最大規模の生物絶滅事件の原因探索に関わるものである．具体的かつ膨大な基礎データとして，世界で最も保存良好な絶滅境界が露出する中国四川省において，詳細な野外調査を基に，大量の採取岩石試料から500 枚以上に及ぶ研磨スラブ試料と1000枚以上の岩石薄片を作成し，詳細な地質記載を行った．さらに多様な微量化学分析，ならびに同位体（炭素・硫黄・窒素）比測定を行い，その結果から，絶滅直前の海洋深層において酸素極小層の異常拡大が起こり，それに伴って浅海での絶滅が起きたと結論した．特筆すべきは，境界直前の還元環境下で晶出した微小方解石プリズムの発見とその堆積期間前後の海水の炭素・硫黄・窒素同位体比変化を示したことであり，世界でも他に例のないきわめて独自性の高い成果である．また最新論文では，自生炭酸塩岩の堆積が全海水の同位体比変化に及ぼす影響についても初めて議論した．これら研究成果は，主著者として執筆した７編の国際学術誌論文にまとめられている．個々の論文のレベルはきわめて高く，その論文被引用回数は，近年になって特に増加している．昨今の欧米の研究手法を追従した論文が多い中で，オリジナリティに溢れる齋藤会員の論文は高く評価できる．

現在，齋藤会員は，フランス国Université Clermont Auvergne（Laboratoire Magmas et Volcans）でポスドクとして研究中であり，さらなる新しい地球化学的分析手法の開発を目指している．一方，顕生代のみならず，太古代および原生代の炭酸塩岩についても，オーストラリアや中央アフリカ・ガボン共和国での野外調査に基づく研究を精力的に進めている．このような新たな分野に積極的に挑戦する研究姿勢からも，将来を期待できる素養・資質を有していると判断される．

このように齋藤会員は，豊富な専門的知識および高度な分析技術をもち，その潜在的能力は同世代の若手研究者の中でも突出しており，日本の地球科学を牽引する新世代のリーダー候補として大きく期待される．以上の理由から，齋藤会員を日本地質学会小澤義明賞に推薦する．

日本地質学会論文賞

対象論文：佐野弘好，2018，岐阜県西部，舟伏山岩体東部の美濃帯ペルム系～三畳系チャート優勢層の層序と年代．地質学雑誌，124，449-467.

本論文は，美濃帯西部，舟伏山岩体東部のチャート優勢層の分布，岩相層序，放散虫化石年代を検討し，その層序と年代を明らかにしたものである．美濃帯のペルム系チャートは，泥岩中の岩塊として産し混在岩相を形成していることから，これまで初生的な層序の全容解明にはいたっていなかった．本論文では，丹念な地質調査に基づいた岩相記載と微化石年代の決定により，チャート優勢層は，玄武岩質岩を基盤とするペルム紀シスウラリアンから後期三畳紀の遠洋性・深海成堆積物であることが明らかにされている．チャート優勢層には，堆積環境の時代変遷が，赤色チャート，砕屑性ドロマイト，黒色粘土岩，珪質ミクライト・チャート互層などの特徴的な岩相として記録されており，今後，古生代から中生代にかけての古海洋環境の時代変遷や，ペルム紀末大量絶滅事変の理解において重要な情報を与えると考えられる．また何より本論文は，地質図・断面図・柱状図に代表される各種地質データや，徹底した岩相記載および微化石年代決定など，地質学雑誌掲載論文の好例ともいえる内容から構成されている点が高く評価される．以上の理由より，本論文を日本地質学会論文賞に推薦する．

日本地質学会論文賞

対象論文：Hitoshi Hasegawa, Hisao Ando, Noriko Hasebe, Niiden Ichinnorov, Tohru Ohta, Takashi Hasegawa, Masanobu Yamamoto, Gang Li, Bat - Orshikh Erdenetsogt, Ulrich Heimhofer, Takayuki Murata, Hironori Shinya, G. Enerel, G. Oyunjargal, O. Munkhtsetseg, Noriyuki Suzuki, Tomohisa Irino, Koshi Yamamoto, 2018, Depositional ages and characteristics of Middle–Upper Jurassic and Lower Cretaceous lacustrine deposits in southeastern Mongolia. Island Arc 27-3, DOI: 10.1111/iar.12243.

本研究は，モンゴルのオイルシェールの空間的および時間的分布を調べ，ジュラ紀および白亜紀の湖沼堆積物の詳細な特徴と古気候的背景を明らかにしたものである．まず，凝灰岩のジルコンU-Pb年代などから，Shinekhudag層はAptian初期に，Eedemt層はCallovian-Oxfordianに堆積したことを示し，堆積速度を評価した．Shinekhudag層のオイルシェール中には藻類起源の有機物と砕屑性粘土からなるマイクロメータースケールの葉理構造があり，降水の季節性を反映した年稿である可能性が高く，堆積速度とも整合的である．筆者らは両層堆積時の広範な湖沼発達に示される気候の湿潤化がOAEとほぼ同時期に起こっている可能性も示した．本研究は，緻密かつ詳細な現地調査とサンプルの分析に基づいて，湖沼堆積物のプロセスを明確に示すとともに，ジュラ紀－白亜紀における陸上－海洋の気候的関連性を示す重要な成果であると評価できる．以上の理由より，本論文を日本地質学会論文賞に推薦する．

日本地質学会 Island Arc賞

対象論文：Catherine Chagué-Goff, Jordan Chi Hang Chan, James Goff, and Patricia Gadd, 2016, Late Holocene record of environmental changes, cyclones and tsunamis in a coastal lake, Mangaia, Cook Islands. Island Arc, 25, 333－349.

Mangaia in the Southern Cook Islands, like many other Pacific islands, is exposed to a range of natural hazards, including cyclones and tsunamis which can be generated not only by local submarine slope failures but also from earthquakes occurring at distant locations along the Pacific Ring of Fire. Chagué-Goff et al (2016) analyzed a 4.3 m-long peat sequence from the shore of Lake Tiriara, in one of the swampy areas inside an old raised coral reef (atoll) in the island interior, which records long- and short-term regional environmental changes over the past 3500 years and also the effect of human settlement. Seawater has been reported to intrude through an underground tunnel into Lake Tiriara in the island interior during cyclones. This is a unique geologic setting if tsunami deposits can be found on raised atolls, which are commonly surrounded by steep cliffs and lack coastal plains. Chagué-Goff et al aimed to identify tsunami deposits and distinguish them from cyclone deposits, based on sedimentological, geochemical and microfossil analyses. Based largely on the distinctive geochemical signature of the deposits, they eventually proposed that one probable paleocyclone deposit and three probable paleotsunami deposits were preserved in the sequence. If similar tsunami deposits are found in other raised atolls, it will help estimate the frequency of tsunami occurrence and maximum wave heights in tropical Pacific islands. This knowledge is expected to be useful for disaster risk reduction in this region.

日本地質学会研究奨励賞

受賞者：加瀬善洋 会員（北海道立総合研究機構地質研究所）
対象論文：加瀬善洋・仁科健二・川上源太郎・林圭一・高清水康博・廣瀬亘・嵯峨山　積・高橋良・渡邊達也・輿水健一・田近　淳・大津直・卜部厚志・岡崎紀俊・深見浩司・石丸聡，2016，北海道南西部奥尻島で発見された津波堆積物．地質学雑誌，122, 587–602.

本論文では，北海道南西部に位置する奥尻島南部の青苗地区において，丹念な津波堆積物調査を実施し，未解明な点が多かった津波履歴を明らかにした．これらの結果に基づくと，(1) 奥尻島では過去3,000–4,000年の間に少なくとも6回の津波があったこと，(2) 過去に発生した津波の浸水範囲から，これらの津波は1993年北海道南西沖地震津波を超える規模であったことが判明した．日本海沿岸域における津波履歴の解明に向けた，貴重なデータと言える．また，津波堆積物を認定する上で重要となる「海水の寄与」を把握するために，有機質微生物遺骸（渦鞭毛藻シスト，有孔虫の内膜）に着目した新たな手法を提案し，その有用性も示した．さらに，本論の結果は，津波浸水想定の見直し等の資料として，国や道の防災計画の見直し等，既に行政施策への活用がなされている．以上のように，本論は学術的に高い意義をもつとともに，日本海沿岸の津波防災地域づくりに貢献する研究として高く評価できる．以上の理由により，本論文の筆頭著者である加瀬善洋会員を日本地質学会研究奨励賞に推薦する．

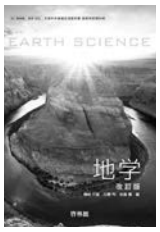
日本地質学会研究奨励賞

受賞者：葉田野　希 会員（長野県環境保全研究所）
対象論文：葉田野　希・吉田孝紀，2018，瀬戸内区中新統瀬戸陶土層の古土壌構成が示す古風化および古気候条件．地質学

雑誌，124，191–205.

本論文は中新統瀬戸陶土層とその上位層を対象に，丁寧な露頭記載，古土壌の岩石学的記載に基づいて，土壌形成に強い影響を与える堆積速度や母材の特性を考慮し，多角的に土壌形成過程と古気候を言及したものである．古土壌の形成を議論する際，古地形を正確に復元することは重要であるが，筆者らは500m以上に渡って連続する露頭観察からそれに成功し，土壌形成時の排水条件を復元したことは価値が高い．これにより信頼度の高い気候復元が可能となった．また，本論文の特筆すべき成果として，季節性の大きな気候下で形成されるヴァーティソルの特徴を持つ土壌を見いだしたことも挙げられる．これは，これまで古生物学的知見から復元されていた古気候に，季節性に関する具体的な情報をもたらした．本論文は，古気候記録媒体として古土壌を扱った数少ない国内での研究例であり，国際的に見てもレベルが高い．以上の理由により，本論文の筆頭著者である葉田野　希会員を日本地質学会研究奨励賞に推薦する．

日本地質学会表彰
受賞者：株式会社新興出版社啓林館



表彰業績：教科書出版を通じた地学教育への貢献

地学の教育と普及の推進は本学会が取り組むべき重要な活動の一つである．学校教育では教科「理科」において地学分野の内容が扱われる．小中学校の段階では，地学には物理や化学，生物とほぼ同等の時間数が当てられ，すべての児童・生徒が地質学の基礎を含む地学分野について学ぶ．しかし高等学校では，地学関係の授業を開講している学校はかなり限定されている現状がある．近年になって科目「地学基礎」を開講する高校は多少なりとも増えているが，科目「地学」についてはいまだ非常に少ない．本学会はこの厳しい現状を直視し，地学分野の教育と普及に一層努めなければならない．

こうした厳しい状況にもかかわらず，科目「地学」の教科書が株式会社新興出版社啓林館および数研出版株式会社の二社から出版されている．この二社は旧学習指導要領下でも科目「地学II」の教科書を出版しており，地学の教育・普及の面でも大きな貢献をはたしている．高校での需要の有無にかかわらず，地学を独学する高校生や一般市民，それに大学で教養レベルの地学の内容を学ぶ学生にとって，二社の教科書の存在はたいへん重要である．さらに地学分野の専門書や参考書が限られる現状も含めて，二社の教科書出版が地質学を含む地学の教育と普及に果たしている役割は非常に大きいと言える．

今後も継続して科目「地学」の教科書が出版されることへの期待も込めて，株式会社新興出版社啓林館を日本地質学会表彰に推薦する．

日本地質学会表彰
受賞者：数研出版株式会社

表彰業績：教科書出版を通じた地学教育への貢献

地学の教育と普及の推進は本学会が取り組むべき重要な活動の一つである．学校教育では教科「理科」において地学分野の内容が扱われる．小中学校の段階では，地学には物理や化学，生物とほぼ同等の時間数が当てられ，すべての児童・生徒が地質学の基礎を含む地学分野について学ぶ．しかし高等学校では，地学関係の授業を開講している学校はかなり限定されている現状がある．近年になって科目「地学基礎」を開講する高校は多少なりとも増えているが，科目「地学」についてはいまだ非常に少ない．本学会はこの厳しい現状を直視し，地学分野の教育と普及に一層努めなければならない．

こうした厳しい状況にもかかわらず，科目「地学」の教科書が株式会社新興出版社啓林館および数研出版株式会社の二社から出版されている．この二社は旧学習指導要領下でも科目「地学II」の教科書を出版しており，地学の教育・普及の面でも大きな貢献をはたしている．高校での需要の有無にかかわらず，地学を独学する高校生や一般市民，それに大学で教養レベルの地学の内容を学ぶ学生にとって，二社の教科書の存在はたいへん重要である．さらに地学分野の専門書や参考書が限られる現状も含めて，二社の教科書出版が地質学を含む地学の教育と普及に果たしている役割は非常に大きいと言える．

今後も継続して科目「地学」の教科書が出版されることへの期待も込めて，数研出版株式会社を日本地質学会表彰に推薦する．

日本地質学会表彰
受賞者：加納　隆 会員（山口大学名誉教授）

表彰業績：地球科学標本室・ゴンドワナ資料室の整備と普及活動

加納　隆会員は，岩石学・鉱床学・鉱物学の専門家であり，定年退職後も幅広い知識と経験をもとに，山口大学理学部において地球科学標本室・ゴンドワナ資料室の整備に努めてきた．またそれらの資料を用いて地質学の普及活動に尽力し，特に大学における研究試料の保存の必要性を自らの実践を通じて訴えてきた．

標本室・資料室とはいうものの，その質・量ともに国内有数の地質鉱物博物館であり，地球科学標本室には国内外の鉱物・岩石標本が，ゴンドワナ資料室には南極・オーストラリア・インド・ヒマラヤなどゴンドワナ大陸の形成に係る地球史40億年をカバーする岩石試料が収蔵されている．実物標本だけでなく，地質図・文献および標本の産状を示す記録写真は山口大学の学術資産として認められている．とくに南極標本の系統的な標本保存とデータ整備は，全国に先駆けたモデルケースとなるものである．

同氏が整理・収蔵した標本数は，12000点を超え，世界の地域地質に関する図書や地質図約1,000点，各標本の産状を示すデジタル化写真は18000点に及ぶ．同氏は標本室に多くの標本を寄贈しているが，その中でも世界各地を訪ねて自ら採取した美しい鉱物・岩石標本は，ひと際目を引く．実物の標本・詳細リスト・産状の記録の3点が揃うことにより標本の価値は一層高まる．これらのデータベースを整えることにより標本検索が容易となり，国内外の研究者への資料提供や学術的成果が見込まれる．また，実物標本とデータのデジタル化と公開によって学生教育と社会教育の観点からの活用が期待される．理学部に開設した標本室のホームページ（http://gondwana.sci.yamaguchi-u.ac.jp/）では標本写真と現場写真を使って地球史40億年，ゴンドワナの地質，日本の地質，山口の地質，資源と鉱石などを解説し，学内外へ地質学の普及に努めている．

このようにして整備された標本は，大学教育に活用されていることは言うに及ばず，国内外からの来訪者にも見学の場が提供され，社会教育へ貢献してきた．同氏は，県内外の博物館など社会教育機関への標本貸出や展示への助言・講演も行っており，それらの入場者数は10万人を超えている．

長年にわたる献身的な標本整備とそれを使った地質学の普及活動は大学における学術資産の保護と活用のあるべき姿を実践したものであり，加納　隆会員を日本地質学会表彰に推薦する．

以上

CALENDAR

2019.7～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
★印は学会主催，（共）共催，（後）後援，（協）協賛．

2019年

7月　July

（後）第56回アイソトープ・放射線研究発表会
7月3日（水）～5日（金）
会場：東京大学弥生講堂（文京区弥生1-1-1）
https://www.jrias.or.jp/

○第194回深田研談話会
7月5日（金）18:00～19:30
場所：深田地質研究所 研修ホール（東京都文京区）
講師：芦寿一郎（東京大学大気海洋研究所海洋底地質学分野准教授）
演題：海底から探る南海トラフの断層活動と地震履歴
参加費無料，70名（先着），＊要事前申込
http://www.fgi.or.jp/

○第224回地質汚染・災害イブニングセミナー
7月25日（木）18:30～20:30
場所：北とぴあ808会議室（東京都北区王子）
講師：益子　保（中央温泉研究所）
演題：「温泉水の重金属排水問題～水濁法との関係から～」
http://www.npo-geopol.or.jp/event.htm

（後）青少年のための科学の祭典：2019全国大会
7月27日（土）～28日（日）
会場：科学技術館（千代田区北の丸公園）
入場無料．また期間中，高校生以下は科学技術館常設展示も無料（大人は通常料金)
http://www.kagakunosaiten.jp/

8月　August

（後）科教協福岡大会・科学お楽しみ広場（第66回全国研究大会）
8月9日（金）
会場：西南学院大学　西南コミュニティセンター（福岡市早良区）
参加無料
https://kakyokyo.org/archives/1319

○第73回地学団体研究会総会（東京）
8月23日（金）～25日（日）
場所：東京都港区 芝学園中学校高等学校
https://www.chidanken.jp

○第225回地質汚染・災害イブニングセミナー
8月30日（金）18:30～20:30
場所：北とぴあ806会議室（東京都北区王子）
講師：山崎晴雄（首都東京大学名誉教授　理学博士）
演題：『首都圏における活断層』
会費：会員500円，非会員　1,000円
http://www.npo-geopol.or.jp/event.htm

9月　September

○第22回日本水環境学会シンポジウム
9月5日（木）～6日（金）
場所：北海学園大学工学部　山鼻キャンパス（札幌市中央区南26西11-1-1）
http://www.jswe.or.jp/event/symposium/index.html

（後）第63回粘土科学討論会
9月10日（火）～12日（木）
（講演会：9月10～11日，現地見学会：9月12日）
会場：埼玉大学（さいたま市桜区下大久保225）
http://www.cssj2.org/publication/annual_meeting/

（共）日本地球化学会第66回年会
9月17日（火）～19日（木）
場所: 東京大学・本郷キャンパス
http://www.geochem.jp/meeting/index.html

○日本鉱物科学会2019年年会
9月20日（金）～22日（日）
場所：九州大学
http://jams.la.coocan.jp/index.html

○第36回歴史地震研究会（徳島大会）
9月21日（土）～23日（月・祝）
会場：徳島大学 地域連携プラザ 地域連携大ホール
http://www.histeq.jp/menu7.html

★日本地質学会第126年学術大会（2019山口）
9月23日（月・祝）～25日（水）
場所：山口大学吉田キャンパス
事前参加登録〆切：8月19日（月）18:00

○日本火山学会2019年度秋季大会
9月25日（水）～27日（金）
場所：神戸大学（兵庫県神戸市）
http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html

10月　October

○第73回日本人類学会大会
10月12日（土）～14日（月・祝）
会場：佐賀大学本庄キャンパス（佐賀市本庄町1）
http://anthrop-meeting.sakura.ne.jp/

○第227回地質汚染・災害イブニングセミナー
10月25日（金）18:30～20:30
場所：北とぴあ808会議室（東京都北区王子）
講師：笹川みちる（雨水市民の会理事，雨水まちづくりサポート理事）
演題：「雨水と賢くくらすには～墨田区の取り組みから」
http://www.npo-geopol.or.jp/event.htm

11月　November

国際ゴンドワナ研究連合2019年総会・第16回ゴンドワナからアジア国際シンポ
11月8日（金）～10日（日）
場所：高知県立県民文化会館（高知市）
野外巡検：11～12日（室戸ジオパーク）
https://www.data-box.jp/pdir/5d75abb24f024058a6a72700bb5e59e9
お問い合せ：Prof. Darren Lingley（高知大学人文社会科学部）：E-mail: lingley@kochi-u.ac.jp

○第30回地質汚染調査浄化技術研修会
11月15日（金）～17日（日）
共催：地質汚染診断士の会・日本地質学会環境地質部会・社会地質学会
会 場：日本地質汚染審査機構 関東ベースン実習センター（香取市）
会 費：会員45,000円・非会員 55,000円・学生：15,000円
http://www.npo-geopol.or.jp/sympo.htm

12月　December

（協）第35回ゼオライト研究発表会
12月5日（木）-12月6日（金）
会場：タワーホール船堀（江戸川区船堀4-1-1）
https://jza-online.org/

○地質学史懇話会
12月22日（日）13:00～17:00
場所：北とぴあ8階803号室（東京都北区王子）
八耳俊文：岡田家武と張定釗の生涯 - 上海自然科学研究所化学科員の政治と科学 -
山田俊弘：地層累重の法則の意味：ステノ『プロドロムス』（1669）出版350周年を記念して（仮題）

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します.

第22回日本水環境学会シンポジウム

日程：2019年9月5日（木）～6日（金）
場所：北海学園大学工学部（山鼻キャンパス）
第22回日本水環境学会シンポジウム（主催：公益社団法人日本水環境学会）は，2019年9月5日（木）～6日（金）に，北海学園大学工学部（山鼻キャンパス，北海道札幌市中央区南26西11-1-1）で開催されます。当会の研究委員会のセッション，本部企画，本部企画（全国環境研協議会共催）のほか，大学院博士後期課程レベルの研究奨励を目的とした若手研究紹介（オルガノ）セッション，年間優秀論文賞（メタウォーター賞）の受賞者講演など，多彩な企画も用意されています.
非会員の方も参加できますので，大勢の方のご参加を期待しております.
※詳しくは学会ＨＰ（http://www.jswe.or.jp/event/symposium/index.html）をご覧ください。

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します.

京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設 教員（教授）公募

募集：教授1名
所属および勤務場所：京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設・本部，大分県別府市野口原3088
専門分野：地熱テクトニクス
勤務内容：地熱・火山現象やそれと関連するテクトニクスの研究と教育を地球物理学的，地質学的あるいは地球化学的に推進する.
資格等：
(1) 博士の学位を有すること (2) 本研究施設が位置する九州の地熱温泉地域や火山を活かした研究に意欲的に取り組むこと (3) 学部および大学院の教育に意欲的に取り組むこと (4) 地域貢献，アウトリーチ活動に積極的であること (5) 野外における観測や調査に従事できること
着任時期：採用決定後，できるだけ早い時期
任期：なし
応募方法および必要書類：
(1) 履歴書（氏名，生年月日，年齢，現住所，連絡先およびe-mail，高校卒業から最終学歴まで，博士学位の名称・取得大学・取得年月日・論文名，職歴，資格，賞罰）
(2) 研究業績目録（以下のA～Dに分類すること）A.査読のある論文や総説　B.査読のない論文や総説　C.著書　D.その他の出版物等で特に参考となるもの
(3) 主な論文の別刷または著書 5編以内（複写可）
(4) 上記 (3) の論文または著書について，内容と意義をA4用紙1枚ずつにまとめたもの
(5) これまでの研究経過（2000字程度）
(6) 今後の研究及び教育についての計画と抱負（2000字程度）
(7) 研究施設の運営やアウトリーチ活動に関する抱負（1000字程度）
(8) 本人について参考意見を述べられる方２名の氏名・連絡先
上記応募書類を，封筒に「教員公募」と朱書きのうえ，簡易書留，または配送状況が追跡可能な方法で送付してください.　また，上記書類の電子ファイル（PDF形式）もCD-ROM等にて提出書類に添付してください.
応募締切：2019年8月20日（火）必着
選考方法：選考段階で，面接または講演をお願いすることがあります.
書類送付先および問い合せ先：
〒874-0903　大分県別府市野口原3088
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設　大沢信二
電話 0977-22-0713
e-mail：ohsawa@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp
研究施設の詳細はホームページ http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp/ をご覧ください.

京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻教授または准教授公募

職種：教授または准教授
募集人員：1名
勤務場所：京都大学大学院 工学研究科 社会基盤工学専攻（住所：京都市西京区京都大学桂Ｃクラスター）
職務内容：資源工学講座計測評価工学分野，そして所属する社会基盤工学専攻や都市社会工学専攻および工学部地球工学科における教育・研究および運営に係る業務
専門分野等：
【専門分野】計測評価工学分野のミッションは，(1) 地殻にある鉱物・エネルギー資源の可採量を増進する，計画的かつ効率良い採出技術の開発，(2) 既開発資源を更に有効に開発・活用する技術に関する計測評価，非破壊検査の研究である．応募者は，石油・天然ガスなどの炭化水素や超深部地熱などのエネルギー開発，地下の高度利用などに必要な地殻内流体挙動の評価や計測，浸透流シミュレーションなどに研究業績を有し，地殻のダイナミクスに基づいた油層開発工学，水理地質学，地質工学，計測評価工学など資源工学の学術的発展に貢献できる分野を専門とすることが望ましい.
【その他】社会基盤工学専攻資源工学講座（応用地球物理学分野，地殻開発工学分野）および都市社会工学専攻地球資源学講座（地殻環境工学分野，地球資源システム分野）と協力しつつ，上記職務内容の任にあたる．そして，計測評価工学分野に配属された学生の特別研究，修士論文および博士論文の研究を指導するとともに，社会基盤工学専攻および工学部地球工学科の上述専門分野に関連する講義科目，学生実験を担当する.
資格等：博士の学位を有すること．当該分野に関する優れた業績を有し，熱意をもって，これらの研究教育に取り組める方．なお国籍は問わないが，日本語での会話および文書による意思の疎通に支障のないこと．また英語による講義の担当が可能なこと.
任期：なし
着任時期：2020年3月1日(または，それ以降できるだけ早い時期)
送付先：〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 京都大学大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 資源工学講座　応用地球物理学分野 教授 三ケ田 均
応募締切：2019年8月30日(金) 必着
問合せ先：Fax: 075-383-3198（担当：三ケ田 均）
Ｅ-mail：mikada@kumst.kyoto-u.ac.jp
応募書類等，公募に関する詳細は，ウェブサイトをご覧下さい.
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/acceptance/other/teacher

岡山大学大学院自然科学研究科地球生命物質科学専攻　教授公募

1. 公募人員：教授1名
2. 採用分野：地球システム科学（岩石圏科学分野または地球惑星化学分野）
3. 着任時期：2020年4月1日以降のできるだけ早い時期
4. 所属：自然科学研究科地球生命物質科学専攻地球システム科学講座（理学部地球科学科兼担）
5. 応募資格：
(1) 博士の学位を有すること．(2) 野外調査，実験，分析など物質科学的手法を用いた固体地球惑星科学に関する研究実績がある方．(3) 地球システム科学講座の教育と研究を，他の教員と連携し熱意を持って推進できる方．(4) 国際的な場での活動に実績と意欲のある方が望ましい．(5) 日本語運用能力が十分にあることが望ましい.
6. 担当予定授業科目：教養教育科目及び学

部・大学院の専門科目
7. 提出書類：
(1) 履歴書（様式１）
(2) 学会及び社会における活動（様式２）
(3) 教育に関する経歴書（様式３）（大学院生の指導実績がある場合は，修士，博士に分けて付記すること）
(4) 研究業績概要書（様式４）
(5) 研究業績目録（様式５）
（外部資金獲得状況は直接経費の総額，分担の場合は直接経費分担金額を記載のこと）
(6) 主要研究業績5編の別刷（最近5年間の業績を主体に代表的なもの；コピー可）
(7) 採用された場合の研究と教育に対する抱負（2000字程度；様式自由）
(8) 応募者について意見を伺える方2名の氏名，所属，連絡先
応募書類の様式１～様式５は，[https://www.gnst.okayama-u.ac.jp/other/koubo/]にあります．応募書類は，A4の紙に印刷したものとPDFをCD等のメディアに保存したものを提出してください．応募書類はメディアも含め返却しません．なお，応募書類は選考目的以外には使用せず，選考終了後，責任を持って処分いたします．
8. 応募締切：2019年8月26 日（月）必着
9. 書類送付先・照会先：〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目１−１
岡山大学理学部地球科学科 学科長 竹中博士
電　話：(086) 251-7881，e-mail: desc-apply@earth.desc.okayama-u.ac.jp

島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター特任助教公募

担当：島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター
職名及び人数：特任助教　1名
専門分野：古環境学
職務内容：広い意味でのエスチュアリーの堆積物と地形の解析から，古環境，古気候，人間活動の影響などに関する研究活動
採用時期：2019年12月1日以降のできるだけ早い時期
任期：採用日から2020年3月31日までの任期とし，毎年更新できるものとする．ただし，通算して3年以内の雇用期間とする．
就業場所：島根県松江市西川津町1060　国立大学法人島根大学松江キャンパス
応募資格　：
・博士の学位を有する方（採用時までに取得見込可）
・上記の職務内容に関わる技術や知識を習得している方
・フィールドワークまたは室内分析の経験が豊富な方
提出書類（様式自由）
(1) 履歴書１部（３ヶ月以内に撮影の顔写真を貼付のこと）(2) 個人調書（本学系所定の様式）（＊1）(3) 発表したすべての査読付き論文の別刷りまたはそのコピー (4) 申請者が獲得した研究資金の一覧（代表・分担を明記）(5) 研究業績の概要と着任後の研究に対する抱負（A ４版用紙 2 枚程度）(6) 教育研究業績書（本学系所定の様式）（＊1）(7) 応募者の連絡先（住所，電話番号，メールアドレス）(8) 推薦状2通あるいは応募者に関する意見を伺える方２名の連絡先（所属，メールアドレスと電話番号）
応募締切：2019 年10月1日（火）消印有効
書類送付先：〒690-8504　島根県松江市西川津町1060
島根大学企画部地域連携・研究協力課　学術研究支援グループ
問合せ先：690-8504 島根県松江市西川津町1060
島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター センター長 齋藤文紀
E-mail: ysaito@soc. shimane-u .ac. jp
Tel: 0852-32-6038
提出書類，応募方法は以下を参照して下さい
https://www.shimane-u.ac.jp/introduction/recruit/recruit_prof/recruit_esrec04.html

岩手大 理工学部准教授公募

1. 募集人員：准教授1名
2. 所属学科・専攻名：システム創成工学科社会基盤・環境コース（学部）／総合科学研究科　地域創生専攻 地域コミュニティ・デザインコース（修士課程）／理工学研究科システム創成工学専攻（博士課程）
3. 専門分野：地質学，応用地球科学に関する分野
4. 担当科目：
学部）地学，入門地域創生論，科学技術英語I，社会基盤・環境工学実験，地域創生課題演習Ⅱ，Ⅲ
大学院）地圏防災特論，防災・まちづくり特論，防災工学特論I，II
その他）理工学部地域創成特別プログラム（防災・まちづくり）担当
5. 応募資格：
(1) 上記専門分野において優れた業績を有し，博士（またはPh.D）の学位を取得していること (2) 上記専門分野の教育・研究に関する十分な能力と意欲を有すること (3) 地質学，応用地球科学に関する分野を専門とし，当学科・専攻において技術者・研究者の育成に積極的に取り組むことができること，学科・専攻の運営に積極的に取り組めること (4) 上記の業務遂行のために十分な語学力（日本語及び英語）を有していること
6. 任用予定年月日：2019年12月1日以降のできるだけ早い時期
7. 任期：なし
8. 待遇：常勤の教員（准教授）としての待遇
9. 提出書類：(1) 履歴書（写真添付） (2) 研究業績一覧：学術論文，国際会議発表論文，著書，その他（総説，解説，審査付き以外の参考論文など）に分類して記載 (3) 主要論文の別刷り（５編，コピ－可）(4) これまでの研究活動の概要（A4用紙2枚程度）(5) 岩手大学着任後の教育・研究に対する抱負（A4用紙2枚程度）(6) 特筆すべき教育・研究業績（受賞や特許など），競争的研究資金獲得状況，社会活動や学会活動など
10. 応募締切：2019年10月1日（火）必着
11. 選考方法：書類審査と面接（書類審査による選考後，候補者について面接を実施する）．岩手大学は男女共同参画を推進しています．業績および資格等に関わる評価が同等と認められる場合には，女性を優先的に採用します．産前産後休暇，育児休業及び介護休業を取得していた場合（性別は問わない）には，選考の過程で考慮します．両住まい手当制度や子育て・介護中の研究者に対する支援策等についてはこちら（www.iwate-u.ac.jp/gender/）をご覧ください．
12. 書類提出及び問合わせ先：
〒020-8551　盛岡市上田4-3-5岩手大学理工学部システム創成工学科　社会基盤・環境コース
コース長　伊藤　歩　宛
TEL/FAX：019-621-6449，E-mail：aitou@iwate-u.ac.jp

農林水産省経験者採用試験（係長級（技術））

民間企業のご経験等を活用して，国の技術行政に携わり，ご活躍いただく方を求めています．
募集機関：農林水産省（人事院）
募集ポスト：係長級
募集人数：技術系全体で約3名
採用時期：2020年4月
応募資格：2019年4月1日において，大学等（短期大学を除く．）を卒業した日又は大学院の課程等を修了した日のうち最も古い日から起算して４年を経過した者で，これらの大学等又は大学院の課程等に在学して情報工学，土木，造船工学，数学，物理，地球科学，化学，生物学，薬学，農芸化学，農学，農業経済，畜産，水産，農業農村工学，林学，砂防，造園又は林産に関する課程を修めて卒業又は修了したもの
地球科学系の職務内容：農業農村整備事業の地質・地下水に関する調査・指導業務その他
受付期間：2019年8月2日（金）～20日（火）
詳細情報は以下ホームページをご覧ください．
人事院　HP: https://www.jinji.go.jp/saiyo/siken/ keikennsya/keikensya_nousui.html
農水省　HP: http://www.maff.go.jp/j/joinus/recruit/keiken/1gi.html
地球科学系の職務内容については，以下ホームページをご参考にしてください．

業務内容HP：http://www.maff.go.jp/j/joinus/recruit/1gi/attach/pdf/kubun-19.pdf
また，経験者採用に関する7/27(土)（省庁合同）に開催されます．詳細は次の人事院ホームページにて案内しております．
説明会情報：https://www.cas.go.jp/jp/gaiyou/jimu/jinjikyoku/goudo_setumeikai.html
なお大学・大学院の新卒者を対象とした職員募集は，国家公務員総合職採用試験として毎年実施しています．

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します．

第60回東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦

1．東レ科学技術賞
候補者の対象：(1) 学術上の業績が顕著な方 (2) 学術上重要な発見をした方 (3) 効果が大きい重要な発明をした方 (4) 技術上重要な問題を解決して，技術の進歩に大きく貢献した方
賞：1件につき，賞状，金メダルおよび賞金500万円（2件以内）
締切：2019年10月10日（木）必着（学会締切：8月31日）
2．東レ科学技術研究助成
候補者の対象：国内の研究機関において自らのアイディアで萌芽的研究に従事しており，かつ今後の研究の成果が科学技術の進歩，発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者（原則として推薦時45才以下）．本助成が重要な研究費と位置づけられ，これにより申請研究が格段に進展すると期待されることが要件．
申請の基となった研究が海外で行われていても差し支えありません．
助成金額：総額1億3千万円．1件3千万円程度まで10件程度とします．
締切：2019年10月10日（木）必着（学会締切：8月31日）
＊推薦をご希望の方は，上記学会締切までに執行理事会宛に応募書類をお送り下さい．
＊各推薦書要旨は，ホームページからもダウンロードできます．
http://www.toray-sf.or.jp
問い合わせ先：公益財団法人東レ科学振興会
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町3丁目3番16号（日本橋室町ビル7階）
Tel：(03) 6262-1655　Fax：(03) 6262-1901
http://www.toray-sf.or.jp

第28回（2019年度）藤原ナチュラルヒストリー振興財団学術研究助成

助成の趣旨：近年，「ナチュラルヒストリー」の研究に対する助成も漸く活発になりつつありますが，その研究は多岐にわたっており，助成は必ずしも十分とはいえません．当財団は，このような状況を考慮し，ナチュラルヒストリーの研究を行っている研究者または研究グループに助成を行うことによって，ナチュラルヒストリーに関する研究の益々の発展に寄与しようとするものであります．また，選考は特に他の機関から助成されにくい研究者を優先します．なお，助成金の学会関係(学会への旅費・参加費・年会費等)並びに間接経費への使用は認めません．
応募資格：日本国内の大学，研究施設に勤務するか，または日本国内に居住し，ナチュラルヒストリーの研究を行っている個人またはグループ．
対象：ナチュラルヒストリーを，動物・非動物（地学・植物）の二分野に分け，このいずれかに対して助成します．今年度は，非動物分野（地学・植物）に対して，研究に必要な資金を助成します．
助成金：本年度は，1件あたり30～100万円 とします．（研究期間：2020年4月1日から1年間）
締切：2019年9月1日（日）当日消印有効
応募方法：所定の申請書に記入の上，財団宛に送付して下さい．
〒153-0051　東京都目黒区上目黒1丁目26番1号 中目黒アトラスタワー 313
公益財団法人藤原ナチュラルヒストリー振興財団
申請書用紙はウェブサイトからダウンロードできます．
【財団ウェブサイト】http://fujiwara-nh.or.jp/

第41回沖縄研究奨励賞推薦募集

沖縄研究奨励賞は，沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し，育成することを目的として，昭和54年に創設されました．本奨励賞は，沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学，人文科学，社会科学）を行っている新進研究者（又はグループ）の中から，受賞者3名以内を選考し，奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものです．
応募資格：
(1) 沖縄を対象とした優れた研究を行っている
(2) 令和元年7月15日現在で50歳以下
(3) 学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた者
(4) 主旨ん ちおよび国籍は問わない
応募方法：
(1)「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」
(2) 研究成果物（論文3点以内，著書がある場合は1冊），
(3) 研究成果物（論文または著者）の要旨（A4判横書き1,000字以内），
(4) 研究業績リスト（著書，論文等30点以内）
応募締切は9月30日となっていますので，**推薦を希望される方は9月6日（金）までに，執行理事会宛にご連絡下さい．**推薦応募用紙は，<http://www.okinawakyoukai.jp>からダウンロードして下さい．
書類提出先・お問い合わせ：
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-7-3
公益財団法人沖縄協会「沖縄研究奨励賞」係
e-mail:okinawakyoukai@okinawakyoukai.jp
TEL：098-997-3011
FAX：098-997-2678

報　告

防災学術連携体総会　報告

防災学術連携体 2019 年度総会が，2019 年 6 月13 日（木）10:30～11:30の日程で田町駅前の日本建築学会建築会館ホールで行われた．参加学会は，現在57学会である．
地質学会からは松田達生地質災害委員長，斎藤　眞常務理事が連携委員として参加した．
議事としては，地質学会総会同様，昨年度の活動成果と決算，今年度の活動予定と予算が提案され，承認された．
報告事項では，10/19～20に名古屋で行われる「ぼうさいこくたい2019」において第8回防災学術連携シンポジウムが気象災害をテーマに行われることになったことが報告された．ただ，今年は今のところ出展募集の話はなかった（一般申込は終了している）．また，来年の春に第9回防災学術連携シンポジウムでは火山学会が関わって，巨大災害のシンポジウムが予定されていることも紹介された．ただ，災害発生状況によってテーマは変わりうるとのことであった．
また，災害時の正確な情報提供のため，防災学術連携体とNHK報道局との連携が報告された．災害時にデマにならない正確な情報を提供していくため，防災学術連携体の委員の連絡先や学会事務局の名簿がNHKに提供されることになった．これまでも地質学会事務局にマスコミから取材があったが，今後さらに社会に情報発信をしていくことが重要になると思われる．

「第2回 防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会」参加報告

2019年6月13日に，日本学術会議講堂において，日本学術会議 防災減災学術連携委員，

内閣官房，内閣府防災（国土強靱化）担当，国土地理院，文部科学省，厚生労働省，経済産業省（産総研地質調査総合センターが出席）などの防災関係者と防災学術連携体の委員が出席し，第2 回 防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会が行われた．今回は災害時医療と理工学分野の連携がテーマであった．地質学の面から見ると，簡易な地質の知識や簡単な地震の発生の仕組みについても，災害現場で対応をする方々には知識が無く，地盤を担当する分野の方でも正しい知識が行き渡っていないことが散見され，考察（判断）を誤らせているように感じられた．ここに地質学の分野が貢献できると思われ，基礎的な地球科学的リテラシーの向上を「こんな簡単な内容はみんなが知っている」と考えず，地域に根ざして行っていくことが，一つの解決策であるように感じられた．

また国土地理院，内閣府防災担当から，SIP 4Dに関連して地図情報のマッシュアップの報告がいくつかあり，地質図Naviで実現されてきたことが，ようやく様々な地図情報のマッシュアップとして実装され始めたという感じがあった．

日本地質学会常務理事　**斎藤　眞**
日本地質学会地質災害委員会委員長　**松田達生**

研究論文不正問題についての報告

地球科学分野における研究論文の不正問題に関して，日本地質学会は2019年4月4日に会長声明を出しました．同年5月に当該論文の撤回が行われたことを機に，同年5月17日に会長声明を再度公表し，研究不正防止を会員に重ねて要請しました．

このたび「日本地質学会倫理綱領」ならびに「日本地質学会行動規範」に基づき，このような事態が再び起こることのないように，日本地質学会は同年6月6日に当該論文筆頭著者の本会会員に対し，文書にて厳重注意を行いましたことを報告いたします．

2019年6月29日
一般社団法人日本地質学会
会長　松田博貴

日本列島と地質環境の長期安定性

地質リーフレット 4

地質環境の長期的利用の観点から、日本の地質環境を分かりやすくまとめたリーフレット。
最新のデータに基づき、日本列島の断層運動、火山・マグマ活動等の特徴、そして将来予測の考え方を示しています。
多くの方々に活用して頂けることを願っています。

編集　一般社団法人日本地質学会　地質環境の長期安定性研究委員会
発行　一般社団法人日本地質学会
2011年1月発行　B2版　両面フルカラー

定価600円（会員頒価500円）
（20部以上の場合割引あり）

購入希望の方は、学会事務局まで。
e-mail: main@geosociety.jp
電話 03-5823-1150

そのほかの地質リーフレットシリーズも好評発売中！
1. 大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害—
2. 大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo−Pollutions
3. 大地をめぐる水—水環境と地質環境—

紹　介

地殻の隆起　山はなぜ高いか

星野通平　著

イー・ジー・サービス，2019年5月1日発行
B5判上製，188頁，
ISBN 978-4-9903950-7-0．定価2,000円+税

山はなぜ高いか？　それは，だれもが興味を抱きつつ，未だに明快な答えが与えられていない地球科学の根本問題の１つである．

著者は「永年にわたって海水準上昇と地球の膨張との関連について筆を執ってきた．しかし，海水準上昇は，地球の膨張現象を明らかにするための中間項として認識すべきであり，地球膨張の本質は，地殻の隆起に表現されている」('まえがき') という．

本書は，著者の独創による『地球微膨張説』を総論として，私たちに身近な日本の山々の成因を各論として，上記の疑問に答えたものである．見馴れた山々に地球史を看破する透徹した著者の地球観を学ぶことができる．

本書の構成は次のとおりである．

まえがき
第Ⅰ部　地殻隆起の駆動力と隆起の形態
　第１章　緒言
　第２章　地殻の隆起を駆動したエネルギー
　第３章　地殻の隆起と海水準上昇
　第４章　地殻の隆起
第Ⅱ部　日本列島各地の地殻隆起
　第１章　領家帯の隆起－領家花崗岩質岩類と準平原問題－
　第２章　日高山脈の隆起
　第３章　西南日本の再生山脈
　第４章　東北日本グリーンタフ域の隆起運動
　第５章　フォッサマグナ地域の隆起
第Ⅲ部　隆起の駆動と隆起形態についての要約
　第１章　地殻隆起の系譜
　第２章　地殻隆起と準平原形成の相関
　第３章　海水準上昇と地殻の隆起
　第４章　地殻の隆起と非隆起
　引用文献・事項索引

第Ⅰ部では，著者の地球観が次のように提示される．火成エネルギーの変遷を基準にすると，地球史は花崗岩時代（始生代），漸移時代（原生代・古生代），玄武岩時代（中生代・新生代）に区分される．全史を支配するのは，マグマの熱源と蓋層の歴史的変化である．不動の海溝底を基準として，原生代末以降の11kmにおよぶ海水準上昇と，それを凌駕する地殻の隆起が，時々の地球の相貌を決定してきた．

現在の地球に広く認められる地塊運動は玄武岩時代を特徴づける変動様式であり，造陸運動（epirogeny）は本来「断層による隆起地形の形成」を意味する．白亜紀以降には塩基性マグマの迸入による傾動山脈・傾動地塊の隆起が主要な変動様式となり，それにまつわる侵食・堆積が地形形成に重要な役割をはたしてきた．

第Ⅱ部では，第Ⅰ部の地球史にもとづいて，日本の山地がさまざまな地球史的履歴をもっていることが解明される．

■領家帯の隆起　領家花崗岩類の生成は玄武岩時代のできごとではあるが，漸移時代の花崗岩マグマによる造山運動が遺存したものである．花崗岩類を侵食した準平原面は，関門層群の基底不整合面として広く保存されている．この準平原は前期白亜紀の海水準に対応して形成されたものであり，海溝底から屹立する平頂海山の頂面を基準に最大で10kmの隆起によって，現在ではチベット高原の高度にまで隆起している．

■日高山脈の隆起　日高山脈はジュラ紀末に遡る前史をもち，層厚10km超に達する堆積作用と花崗岩質火成活動を経験した．現在の山脈地形は，ネオテクトニクス期の前縁逆断層をともなう傾動運動によって骨格がつくられ，第四紀の氷河侵食によって完成した．玄武岩時代の山脈でありながら，前史に漸移時代の変動様式を反復した山脈である．

■西南日本の再生山脈　西南日本では，東西方向の帯状構造に重なって，N-S性の多くの後生山系が存在する．これらの山系は，後期原生代に起源をもつ再生山脈である．というのは，①東西性の基盤構造そのものに南北性の構造要素が内在し，②N-S山系では後期原生代を特徴づけるA-タイプ花崗岩や派生岩類が活動し，③駿河湾には古生代型のサメや巻貝が遺存していて，④E. ナウマンの主張のとおり，本州中央対曲の形成に関与した伊豆・七島の抵抗体の先在が想定されるからである．

■東北日本グリーンタフ域の隆起　中期始新世～中新世末の間に，海水準は-2,500mから-2,000mへ上昇した．それは，主に中期中新世の西黒沢海進をもたらした大洋底玄武岩活動の上げ底作用による．この作用は油田地帯などに広く傾動地塊運動をひきおこし，やがてグリーンタフ域が山地を形成した．

■フォッサマグナ地域の隆起　フォッサマグナは原生代末のN-S性オーラコゲンに由来し，中新世には，その周縁隆起と西黒沢海進によって深海域になった．鮮新世以降に顕在化するフォッサマグナと中部山岳地帯の隆起は傾動運動によるもので，アイソスタシーではなく，玄武岩質マグマの底置に起因する．同様の東上がりの傾動運動は，ユーラシア東部の大地形にも共通する．

第Ⅲ部では，地殻隆起の系譜が簡潔にまとめられ，その中に日本各地の山地形成史が位置づけられる．さらに，準平原の形成，海水準上昇，地殻の隆起と非隆起の３つのカテゴリーが論じられ，「地球の本質はその微膨張であり，.....地殻の隆起の駆動力はマグマ」であると結論される．

著者がこれまで，多数の著作をとおして追求してきた課題は，次の一点に尽きるように思われる．「地質学の最大の目的の一つは，地球の歴史を如何に具体的にあむか」にあり，「そのためには，地質学のあらゆる分野（層位学・古生物学・岩石学・鉱床学等々）の成果を，総合的に理解し，かつ，編さんすることが，絶対に必要になってくる」（井尻，1961：『地質学の諸問題』日本地質学会）．そして，96歳を迎えて世に送った「本書の中心課題は，地殻の隆起と非隆起と，その逆転であるが，このことは，将来にわたって追求して行きたい」と，次なる展開が計画されている．

雑誌『正論』は，1994年３月号に「定説は本当に正しいか」を特集した．著者は『大地は動かなかった』との論説を寄せ，大多数の科学者によってプレート説が「あたかも公理とされ，それによって万象を解釈しよう」とされていることに警鐘を鳴らした．論説の冒頭では，「地動説と単子説（物質の最小単位の永遠性）を説いたブルーノは，通説に背くものとして火刑に処せられた」史実が顧みられている．

今日のテクトニクス研究をとりまく閉塞状況を打開するには，地球科学界に蓄積されている厖大な研究成果を"万能のプレート説"に従って解釈するのではなく，それらを自らのものとして，まったく新しい仮説を創造することが不可欠である．本書はその先駆をなす一冊であり，科学史や科学論の側面からも注目すべき著作である．

［問合せ先］〒005-0861 札幌市南区真駒内138-86 イー・ジー・サービス．TEL 080-8287-5853/E-mail egssato@outlook.jp

（**矢野孝雄**）

基礎地質学ノート

佐野弘好著

古今書院，2019年6月6日 発行，B5判，180ページ，ISBN978-4-7722-3191-6，定価3,200円（税別）

学部学生を対象に，「高等学校で『地学基礎』もしくは『地学』を履修したひとはいますか？」と質問すると，100人中2，3名しかいないという現実を目にすることがある．このような現状を踏まえて，大学教育で最初に教えるべき「地質学」の内容はいったい何であろうかと，あれこれ考え合わせることが多い．

そんな悩み多き新年度の早々に，古今書店から「基礎地質学ノート」という教科書が刊行された．この教科書について，大学で地質学に関する講義をする立場から紹介してみたいと思う．

本書は著者が，1999年度から2018年度まで九州大学理学部地球惑星科学科の専攻教育科目として担当していた「基礎地質学」について，講義ノートの内容を補強し教科書としてまとめたものである．「まえがき」によると本書には，高等学校で地学を履修していない学部一・二年生が身につけておいてほしい地質学の基礎的内容が解説されている．長年フィールドワークを軸とした研究を実践されてきた著者が，地球惑星科学の一分野である地質学について，基礎中の基礎，すなわち「ミニマル・エッセンス」と考えられる内容を，全180ページに凝縮したのが本書である．

本書の内容を簡単に紹介する．本書は３部構成の全16章からなっている．「基礎地質学の講義ノート」と紹介されているように，各章が講義の一コマ分に相当するようである．

第I部では，地球システムを構成する大気，水圏，固体地球，生物圏の概要，およびプレートテクトニクスについて解説されている．固体地球圏についてやや踏み込まれた解説がなされているが，それは後半部のプレートテクトニクスでの解説を念頭においているためだろう．地質学やプレートテクトニクス成立の歴史についても解説されており，地質学初学者には読みやすい内容となっている．

第II部は，「ロックサイクル」の考えを軸にした地殻構成物質に関する内容から構成される．第I部で大気・水圏やプレートテクトニクスについて解説されたのも，それらがもたらす地質学的作用が，ロックサイクルと深い関係があるためであろう．第II部の各章タイトルは次のようになっている．

第4章　鉱物
第5章　ロックサイクル
第6章　マグマ
第7章　火成岩
第8章　風化・侵食
第9章　砕屑物の運搬・堆積
第10章　続成作用
第11章　堆積岩
第12章　変成岩

これらの章タイトルからも明らかなように，火成岩，堆積岩，変成岩と，それらの岩石を関連づける地質学的作用（例えば，マグマ分化，風化/運搬/堆積/続成，変成，溶融）について，ロックサイクルを一周するように順を追って解説されている．著者が「ややクラシックな表現かもしれない」としつつも，地質学の目的を「地表および地殻最上部で進行する地質現象とその時間変化を記述し，原因・背景を探ること」と説くように，このロックサイクルに基づいた解説が本書の中心的内容といえる．

第III部には，「時間」をキーワードにした地球表層環境の変化について研究する方法が解説されている．具体的には，野外調査から過去の地球を探る方法（第13章），地殻構成物質の変形（第14章），地質年代と層序（第15章），堆積相と堆積環境（第16章）の４章から構成される．特に第16章の「堆積相と堆積環境」は，他の章に比べて多くのページが割かれているが，これは「基礎地質学」の発展的内容と位置付けられる「堆積学」の内容に関するものであることによる（「まえがき」には学部三年生を対象とした「堆積学」の内容とある）．

さてこの教科書の全体の印象としては，第I部，II部，III部と順番に読み進めることで，地殻上部を含む地球表層環境の地質現象について，基礎とその時間変化を正しく理解することができるのではないかと感じる．私にとっては，特に第II部のロックサイクルに関する解説が重要であった．海外に目をやると，地質学の基礎に関する教科書はたいていロックサイクルに基づいて解説されているが（例えば，Foundations of Earth Science, 2013, Pearson Education Limited），国内の教科書でこのような地殻構成物質とその物質循環について中心的に解説されたものはこれまでなかったように思う．実際に私が担当してきた地質学の基礎に関する講義でも，海外の教科書を用いてこのロックサイクルについて解説を行なってきた．日本語で書かれた本書は，地質学をはじめて学ぶ学部学生にとっても歓迎されることだろう．

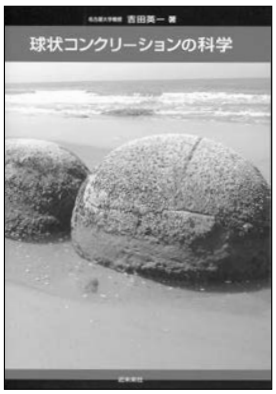
また本書には，著者がさまざまな資料をもとに作成した図版が多数掲載されており，これら統一感のある図版が内容の理解に大きく役立っている．特に薄片写真や露頭写真は，古今書院のホームページからダウンロードできる点も大きな特徴である（ダウンロードには本書中に書かれているパスワードが必要）．フィールドにでかけ露頭を観察することが，地質学一番の学習方法であることは誰もが承知しているところだが，近年のカリキュラムで学生をフィールドに連れて行くことはなかなか難しい．古今書店からダウンロードできる露頭写真は，これらの問題を補う資料になるだろう（むろん本書を読んだあとは，実際にフィールドへ出てほしい）．

以上本書は，学部一・二年生を対象に書かれた教科書とされているが，教員の立場からみると，半期に教えるべき地質学のエッセンスが凝縮された，講義の指針となる「解説書」の性格も併せ持っている．ここであらためて注釈を加えると，本書は最新の地球科学の知識を補ったり，地球惑星科学の中で地質学分野の役割を捉えたりすることを目的とした本ではない．あくまで「地質学」という地球惑星科学の一分野に特化し，その基礎について解説された書である．このような教科書は意外と少なく，これから地質学分野を学ぶ学生にとっても，またそれを教える立場にある人たちにとっても，さらには土木・建設・環境・自然災害・地下資源など，地質と向き合う地質学「卒業生」にもおおいに役立つ教科書となろう．

（尾上哲治）

球状コンクリーションの科学

吉田英一　著



近未来社，182ページ，2019年6月15日発行，
定価3200円＋税，
ISBN 978-4-906431-52-6 c 1044

野外で地層を観察していて，地層中にコンクリーション（ノジュールと呼ばれることが多い）を見たことがある方は多いだろう．このコンクリーションの中には保存良好な化石が見いだされることが多く，化石研究者等からは注目されていたが，その成因については長年謎のままだった．本書の著者はその成因を明らかにすべく，果敢に挑み，ついに近年その成因を明らかにした．本書は，著者の国際誌4編に出版された研究内容を中心にまとめたものである．

著者は，地下環境における元素の移動現象に関する研究を専門とし，これまで岩石の割れ目充填鉱物の形成や地下水との反応に伴う変質作用，風化作用や続成作用など様々な岩石―水反応現象に対する顕著な研究成果を出している．コンクリーションの成因研究もその一連の研究に含まれる．

本書は，序章　球状コンクリーションに学ぶ，第1章　球状コンクリーションの不思議，第2章　ツノガイコンクリーション，第3章　鉄コンクリーション，第4章　コンクリーションの未来からなる．

序章では，コンクリーションの定義から，コンクリーションに関係する問題点，そしてコンクリーションの成因がわかることによる今後の研究の発展などが，著者の研究への熱い思いと共に記載されている．そしてこの研究が，将来的に地下水の流れる亀裂や空隙のシーリングや，地下構造物やトンネルなどの劣化部の亀裂修復などに応用可能であることにも言及している．さらに，この研究は火星に見いだされている鉄コンクリーションの成因についても明らかにしたことが紹介されている．

第1章では，国内外の様々な球状コンクリーションの産状が紹介されている．昔から知られていたコンクリーション内の保存良好な化石をはじめ，日本各地から34箇所の球状コンクリーションの産出地点とその産状がまとめられている．北海道石狩地区の最大2 mの例や宮崎県の1 mを越える例などから，数cmまでの小さなものまで，その産状がカラー写真にて記載されている．よくこれほど多くのコンクリーションを集めたものと感心させられる．この章はコンクリーションのガイドブックといってもいいだろう．さらに本章後半には，海外の例が記載されており，中国，イギリス，ニュージーランドの例が紹介されている．海外でも1 mオーダーの球状コンクリーションが産出しているようだ．また，一部のコンクリーションの元素分布解析の例が示されており，地球化学的特徴も示されている．

第2章では，ツノガイコンクリーションにスポットが当てられている．このコンクリーションは炭酸カルシウムでできており，著者らの研究でコンクリーションの成因を解明することのできた最初の研究対象物である．ツノガイコンクリーションの研究により，このコンクリーションは数週間ほどという非常に速い速度で形成されたことも分かり，その形成メカニズムの全容が世界で初めて明らかにされたのである．本章では，そのメカニズムについて詳細にカラー写真，元素マッピングデータ，薄片写真，X線回折分析，電子顕微鏡写真，蛍光X線分析による化学組成，炭素同位体（δ^{13}C）分析結果など豊富なデータを掲示し，球状コンクリーションの形成メカニズムの説明を論理的に展開している．また，要所ではそのメカニズムについて，わかりやすいイラストが配置されており，理解を助けている．

第3章では，鉄コンクリーションにスポットを当てている．このようなコンクリーションの形成には鉄が水（などの流体）に溶けて移動する必要がある．鉄コンクリーションは火星でもその存在が確認されている．このことは火星にも水（元素を溶解させる溶液）があり，そのような反応を進行させる時期があったことを示しており，火星の進化を知る上でも興味深い現象である．アメリカ・ユタ州での鉄コンクリーションの産状の紹介をはじめ，同時に炭酸塩コンクリーションの産状との関係を調べ，炭酸塩コンクリーションから鉄コンクリーションへの形成過程が詳細に示されている．同様にモンゴル，ヨルダン，日本の鉄コンクリーションの産状に加えて，火星の鉄コンクリーションの産状も紹介されている．

第4章では，コンクリーション研究の今後の展開の可能性について紹介されている．著者らはツノガイコンクリーションの成因を探っている際に，コンクリーションにSrが濃集していることを見いだし，このSr同位体比を用いて年代測定ができる可能性を指摘している．また，数週間という極めて短時間で炭酸塩コンクリーションが形成されるという現象を用いて，応用地質学的に割れ目や空隙のシーリング技術への活用や、コンクリート構造物の割れ目などの修復技術などへの応用の可能性が紹介されている．

このように，本書は地質調査の時に普段何気なく見ていたコンクリーションの成因を詳細に紹介し，その研究の未来への可能性を述べたものである．豊富なカラー写真やイラストも助けとなり，ついついこの世界に引き込まれ，あっという間に読み終えてしまった．地質学の純粋な研究から，その自然現象に学び，そして社会への貢献が期待される成果が得られるという典型的な例を示している書物である．ご一読をおすすめする

（**竹内　誠**）

会員の声

赤石山荘の存続について

ウォリス サイモン（執行理事：東京大学）
青矢睦月（四国支部幹事：徳島大学）
水上知行（正会員：金沢大学）

東赤石岩体（愛媛県新居浜市別子山）は沈み込み帯上盤側のウェッジマントルに由来するかんらん岩体で，マントル物質の物理的・化学的挙動や周囲のスラブ由来物質（高圧型変成岩類）との相互作用を究明する上で，世界的に見ても最重要地域の1つと言えます．この岩体の上，標高1550mに立つ赤石山荘（写真）が現在，存続の危機にあります．

地質学とのつながり：東赤石岩体へのアプローチには比高約1000m（健脚者でも約2時間半）の登山を要し，また，この岩体の分布が1.5×5 kmと広大であるため，これまでに多くの研究者が赤石山荘への宿泊を必須条件として調査研究を進めて来ました．その結果，Mizukami et al. (2004; Nature)，Wallis et al. (2011; GSL Special Publications)，Aoya et al. (2013; Geology)など，数々の研究成果が生み出され，現在でもスラブ-マントルの相互作用，特にスロー地震発生場での現象究明など（Mizukami et al., 2014; EPSL），地質学上の最重要課題に関する情報を握る地域として調査研究が進行中です．また赤石山荘がなければ，地質学会愛媛大会の三波川帯巡検（青矢ほか2017；水上・山岡2017）で，参加者15名を東赤石かんらん岩体へと案内することは不可能だったでしょう．今後，現赤石山荘の位置に宿泊施設がなくなった場合，上記のような研究・巡検の遂行が極めて困難となり，地質学界にとって大きな不利益が生じることが予想されます．

現況報告：管理人・安森滋氏（愛媛県西条市在住）による小屋番登山842回という超人的努力により，これまで33年間，赤石山荘は地質学者を含めた登山者に安全な宿泊先を提供し続けて来ました．ところが2018年5月，当時75歳の安森氏が842回目の下山後に体調を崩し，自身での山荘経営を断念．後継の管理者も見つからず，現在，山荘は安森氏の山仲間による月1回程度の臨時小屋番によってなんとか維持されています．この状況を受け，登山者の安全確保が必須と考える安森氏は，2018年10月に新居浜市に対し，また2019年1月には愛媛県に対して次の2点を求める陳情を行いました．(1) 民営が困難となった赤石山荘を新居浜市へ移管すること，(2) 老朽化の進む赤石山荘の現位置に新居浜市所管の避難小屋を新たに建設し，永続的に経営すること．そして，2019年6月初旬まで，この趣旨への賛同者からの署名活動が行われていました．

地質学会は2019年4月6日，安全な研究フィールドの確保と維持を願う学術団体の立場から，新居浜市長と愛媛県知事に対し，安森氏の陳情受け入れを求める要望書を会長名で作成しました．新居浜市長宛の要望書は6月14日，安森氏らと共に新居浜市役所を訪れた西山賢一四国支部長の手で，4359名分の署名と同時に直接，石川勝行新居浜市長へと提出されました．また，愛媛県知事宛の要望書は同日，同メンバーにより山中美幸愛媛県自然保護課長へと提出されました．市長への提出の様子はNHK松山放送局ならびに愛媛新聞社の取材を受け，TV・web・紙面にて報道されました．次のURLで動画を閲覧できます（8月中旬まで）．

NHK松山 ひめポン！動画「東赤石山の山小屋存続求め署名提出」
https://www.nhk.or.jp/matsuyama/himepon/movie/movie_190614-4.html
（本件問い合わせ先：青矢睦月aoya@tokushima-u.ac.jp）

赤石山荘（2007年11月4日撮影）

引用文献

Aoya, M., Endo, S., Mizukami, T. and Wallis, S. R. (2013) Paleo-mantle wedge preserved in the Sambagawa high-pressure metamorphic belt and the thickness of forearc continental crust. *Geology*, **41**, 451-454.

青矢睦月・水上知行・遠藤俊祐（2017）巡検案内書 三波川帯トラバース：最浅部変成岩から最深部超苦鉄質岩まで．地質雑，**123**，491-514.

Mizukami, T., Wallis, S. R. and Yamamoto, J. (2004) Natural examples of olivine lattice preferred orientation patterns with a flow-normal a-axis maximum. *Nature*, **427**, 432-436.

水上知行・山岡 健（2017）Fコース 三波川帯トラバース：最浅部変成岩から最深部超苦鉄質岩まで（巡検報告）．日本地質学会News，**20**, no.11, p.15-16.

Mizukami, T., Yokoyama, H., Hiramatsu, Y., Arai, S., Kawahara, H., Nagaya, T. and Wallis, S.R. (2014) Two types of antigorite serpentinite controlling heterogeneous slow-slip behaviors of slab-mantle interface. *Earth Planet. Sci. Lett.,* **401**, 148-158.

Wallis, S. R., Kobayashi, H., Nishii, A., Mizukami, T. and Seto, Y. (2011) Obliteration of olivine crystallographic preferred orientation patterns in subduction-related antigorite-bearing mantle peridotite: an example from the Higashi-Akaishi body, SW Japan. *In* D. Prior and E. Rutter, eds., *Deformation Mechanism, Rheology and Tectonics: Microstructures, Mechanics and Anisotropy*, Geol. Soc. of London, Spec. Publ., **360**, 113-127.

意見・提言

東赤石山「赤石山荘」の存続について（要望書）

日本地質学会は2019年4月6日，安全な研究フィールドの確保と維持を願う学術団体の立場から，新居浜市長と愛媛県知事に対し，赤石山荘管理人 安森 滋氏の陳情受け入れを求める要望書を作成しました．新居浜市長宛の要望書は6月14日，安森氏らと共に新居浜市役所を訪れた西山賢一四国支部長の手で，4359名分の署名と共に直接，石川勝行新居浜市長へと提出されました．また県知事宛の要望書も同日県担当課へ提出されました．

平成31年4月6日

愛媛県知事
中村時広 様

新居浜市長
石川勝行 様

東赤石山「赤石山荘」の存続について（要望書）

〒101-0032
東京都千代田区岩本町2-8-15
井桁ビル6F
一般社団法人　日本地質学会
会　長　　松田博貴　　印

拝啓

貴県（貴市）におかれましては，ますますご発展のこととお慶び申し上げます．

貴県新居浜市（貴市）に属する東赤石山の赤石山荘（民営）につきまして，その経営管理者の高齢化と後継者の不在により存続が危ぶまれているとのことを，当学会四国支部の会員及びその地域を研究フィールドとしている会員らからの情報で知りました．

当学会では，2017年9月に愛媛大学で学術大会を開催した折に，地質学的，岩石学的に大変重要な意味を持つ東赤石山周辺において地質巡検を実施いたしました．特に最重要の観察対象であるかんらん岩体へのアプローチには比高約1000mの登山を要するため，赤石山荘なしでの巡検実施はあり得ませんでした．当日は台風の影響で登山道が荒れ，予定よりも行程が遅れたものの，赤石山荘への宿泊を介していたため，問題なく巡検を終えることができたとの報告を受けております．

また研究活動においても，日本各地から多くの研究者や学生が東赤石山及び周辺の地質調査を継続的に行っており，これまでにも国際的な研究成果を含む数多くの重要な研究がなされ，日本の地質学研究の発展に大きく貢献している場所でもあります．また赤石山荘への複数回の宿泊を経て作成，出版された5万分の1地質図幅「新居浜」及び同説明書（青矢ほか，2013）は，新居浜地域の防災，環境保全，産業立地等に貢献するための基礎資料を提供するものです．近年では，地震予知に繋がる「スロー地震」のメカニズム究明に関する研究もなされ，今後想定される海溝型巨大地震に対する防災・減災にも寄与しています．

このようなことから，赤石山荘のような山小屋は，一般の登山者はもとより，私たち地質学を研究する者にとっても安全な研究活動を継続していくためにきわめて重要な存在であり，今後も存続することを強く望むものであります．

地元の関係の方々におかれましては，この件の重要性に鑑み，貴県をはじめ新居浜市などに対しても現赤石山荘を新居浜市に移管し，老朽化した建物の跡地に避難小屋を建設し，永続的な管理運営をしていただくことを要望し，具体的な働きかけをされていると聞き及んでおります．

日本地質学会としては，研究者が安心して活動ができる安全な研究フィールドの確保と維持のため，ぜひとも山小屋の存続，それに代わる避難小屋の建設等に関し，貴県（貴市）のご理解と積極的なご支援を賜りたくお願いをする次第でございます．

なお本要望書とともに，ご参考までに東赤石山周辺での研究活動による業績を添付いたします．

敬具

（注）実際の要望書は各宛名ごとに作成し，提出されました．

地質リーフレットたんけんシリーズ4

富士山 青木ヶ原溶岩のたんけん
―樹海にかくされた溶岩の不思議―

シリーズ1・2・3
「箱根」「屋久島「城ヶ島」
も好評発売中！

編　著：日本地質学会地学教育委員会
発　行：一般社団日本地質学会

定価400円（会員頒価300円）
※20部以上ご注文の場合は割引あり

青木ヶ原の「溶岩」をテーマにしたリーフレットができました．
道の駅や西湖コウモリ穴など，アクセスしやすい観察ポイントです．写真やイラストをふんだんに使用し，わかりやすく火山現象を解説しています．

購入希望の方は、学会事務局まで．e-mail：main@geosociety.jp　電話：03-5823-1150

Islands Arcは，2016年より隔月出版となりました．最新号のVol. 28, Issue 4が2019年7月に発行されました．学会ホームページから会員ログインすると全文がオンラインで無料閲覧できます．是非ご覧下さい．

（Island Arc編集委員会）

Vol. 28, Issue 4（July）

［PREFACE］

1. Thematic section: Proceedings of InterRad XV

Katsuo Sashida Atsushi Matsuoka Tekin U. Kagan Keisuke Ishida

［RESEARCH ARTICLE］

2. Post - Great Oxidation Event Orosirian–Statherian iron formations on the São Francisco craton: Geotectonic implications

Carlos A. Rosière Andrey Bekker Vassily K. Rolim João Orestes S. Santos

3. U–Pb zircon geochronology of the Hida gneiss and granites in the Kamioka area, Hida Belt

Mami Takehara Kenji Horie

飛騨帯神岡地域の飛騨片麻岩及び花崗岩のウラン-鉛ジルコン年代学

竹原真美，堀江憲路

飛騨帯神岡地域には，船津せん断作用で変形した花崗岩質マイロナイト，それに貫入する非変形の花崗岩，および飛騨変成作用による縞状片麻岩が産する．これらの岩石のジルコンを対象に，高精度高分解能イオンマイクロプローブ（SHRIMP）を用いて，ウラン－鉛（U-Pb）年代測定と酸素同位体比の分析を行った．非変形の花崗岩は，船津せん断作用で変形した花崗岩質マイロナイトに貫入しており，ジルコンのU-Pb年代値はそれぞれ，199.1±1.9 Ma及び242.6±1.9 Maである．また，ジルコンの酸素同位体比（$d^{18}O_{VSMOW}$）はそれぞれ、7.74±0.37 ‰，5.74±0.17 ‰であり，異なるソースに由来することが示唆される．これらの年代より，船津せん断帯の活動時期は，242.6 Maから199.1 Maの間に限定され，これは，立山地域における年代学的制約と整合的である．また，神岡地域の縞状片麻岩の原岩は堆積岩であり，U-Pbジルコン年代値は245.0±6.6 Maの広域変成作用を示す．よって、飛騨変成作用は船津せん断帯の変形作用よりも前に起こったことが示唆される．

Key words：飛騨帯；船津せん断帯；U-Pbジルコン年代；ジルコンの酸素同位体比

4. Late Anisian radiolarian assemblages from the Yarlung-Tsangpo Suture Zone in the Jinlu area, Zedong, southern Tibet: Implications for the evolution of Neotethys

Dishu Chen Hui Luo Xueheng Wang Bo Xu Atsushi Matsuoka

南チベットZedong, Jinlu地域のヤールン－ツァンポー縫合帯から得られた三畳紀アニシアン新世の放散虫群集：ネオテチス海の進化における意義

Dishu Chen, Hui Luo, Xueheng Wang, Bo Xu & 松岡　篤

豊富な三畳紀放散虫化石が，チベット南部Zedong Jinlu村近郊のBuruocangセクションに露出する多色層状チャートから得られた．含放散虫岩は，ヤールン－ツァンポー縫合帯東部のメランジュコンプレックスに属するネオテチス海堆積物の一部を代表する．本セクションから新たに得られたアニシアン新世中期の2つの群集，すなわち　Oertlispongus inaequispinosus 群集とTriassocampe deweveri群集は，ヨーロッパ，極東ロシア，日本，トルコから知られている群集に比較される．これらのアニシアン放散虫化石の報告はチベット南部からは初めてであり，ヤールン－ツァンポー縫合帯における最古の放散虫記録である．これらの産出記録は，ネオテチスの進化について，より確かな年代的制約を与えるものである．

Key words：生層序，放散虫，三畳紀，ヤールン－ツァンポー縫合帯，ネオテチス，チベット

Biostratigraphy, Radiolaria, Triassic, Yarlung-Tsangpo Suture Zone, Neotethys, Tibet

5. A middle Miocene post - rift stress regime revealed by dikes and mesoscale faults in the Kakunodate area, NE Japan

Toshiki Haji Jun Hosoi Atsushi Yamaji

羽地俊樹・細井　淳・山路　敦

約15 Ma以降のポストリフト期の東北日本では，地質図規模の断層活動がなくなる．この時期のテクトニクスを理解するには，地殻が大変形せずともできる，岩脈や小断層が鍵となる．しかし以前の研究では，平行性の悪い岩脈群や，非Anderson型断層を扱えなかった．そのため，ポストリフト期の応力状態は不明確だった．

本研究では，秋田県角館地域の中新統塩手沢層・砂子渕層・鵜養層から28枚のドレライト岩脈，10枚のデイサイト岩脈，59条の小断層のデータを採取し，最新の応力解析法を適用した．層位的制約と放射年代から，岩脈の貫入年代はそれぞれ約16–12 Maと約15–12 Maと推定された．岩脈と小断層からともに，σ3軸がNW-SE方向の正断層型応力を得た．小断層の活動時期は不明確だが，岩脈から得られた応力との類似性から，大部分が貫入と同時期だろう．ポストリフト期には，地質図規模の変形がほとんどない状況で，正断層型応力が継続していたことが分かった．

Key words：リフティング，ポストリフト，小断層解析，岩脈解析，古応力，U-Pb年代，フィッション・トラック年代

6. Low-temperature thermochronological database of bedrock in the Japanese Islands

Shigeru Sueoka Takahiro Tagami

日本列島における基盤岩類の低温熱年代データベース

末岡　茂・田上高広

日本列島における熱年代データの利用の簡便化と，長期の削剥史の把握を目的として，基盤岩類における低温領域の熱年代データ（フィッション・トラック年代とU–Th–Sm)/He年代；以下，FT年代とHe年代）のコンパイルを行った．全90編の文献から1,096点のデータを抽出し，アパタイトFT年代418点，ジ

ルコンFT年代851点，アパタイトHe年代42点，ジルコンHe年代30点を収集した．FT年代は相当数の報告があるのに対し，He年代の報告は少数にとどまっている．また，既報年代は中部～近畿の山岳地域や四国の太平洋沿岸で多く，東北地方や中国地方で少ない傾向が見られた．島弧スケールでの隆起・削剥史の更なる理解のためには，既報年代が少ない地域におけるデータの拡充（特にHe年代）が望まれる．本コンパイルリストは，日本FT研究会のHP（http://ftrgj.org/index.html）にて更新版を漸次公開予定である．

Key words：データベース，低温領域の熱年代学，フィッション・トラック年代，(U–Th–Sm)/He年代，長期の削剥史，日本列島

7. Timescale of material circulation in subduction zone: U–Pb zircon and K–Ar phengite double - dating of the Sanbagawa metamorphic complex in the Ikeda district, central Shikoku, southwest Japan

Mitsuhiro Nagata Kazuhiro Miyazaki Hideki Iwano Tohru Danhara Hideyuki Obayashi Takafumi Hirata Koshi Yagi Yoshikazu Kouchi Koshi Yamamoto Shigeru Otoh

沈み込み帯における物質循環のタイムスケール：西南日本四国中央部池田地域の三波川変成コンプレックスのジルコンU–Pb・フェンジャイトK–Ar複合年代

長田充弘，宮崎一博，岩野英樹，檀原　徹，大林秀行，平田岳史，八木公史，高地吉一，山本鋼志，大藤　茂

沈みこみ帯における物質循環の時間スケールを検討するため，池田地域の四国三波川変成コンプレックスのジルコンU–Pb年代及びフェンジャイトK–Ar年代測定を行った．当地域に分布する三縄ユニットと小歩危ユニットは四国三波川コンプレックスの主要構成ユニットである．構造的上位の三縄ユニットでは，約150 Maの海洋地殻に91–81 Maの海溝充填堆積物が堆積し，72–65 Maまで変成・変形作用が進行したと推定された．この推定は，90 Ma頃にイザナギプレートがユーラシアプレートへ沈み込んでいたことを支持する．一方，下位の小歩危ユニットでは，76–74 Maの堆積年代と64–60 Maまでの変成・変形作用の進行が見積もられた．当地域の三波川変成コンプレックス全体では，約3000万年の時間スケールで，海溝での堆積，沈み込み帯深部での変成・変形，及び地殻浅部への上昇が連続して起こっていたと推定される．

Key words：高圧変成岩，三波川変成コンプレックス，ジルコン，白亜紀，フェンジャイト

表紙紹介：長門峡の重塀岩

写真：**永山伸一**（永山建設株式会社）　文：**今岡照喜**（山口大学）

「長門峡」は山口県中央部の山口市と萩市にまたがる地域に位置し，1923年には「名勝及び天然記念物」，1960年には「県立自然公園」に指定されている．水墨画のような渓谷美は見事で，新緑や紅葉の季節には多くの観光客が訪れる．この長門峡の開発と観光化には，わが国で最初の地質図『山陽山陰地質記事』（1874年）を作成した地質屋でもあり画家として高名な高島北海（本名：得三）が大きく貢献した．長門峡と命名したのも北海であり，長門峡は北海が主導したまさに現代のジオパークである．

長門峡重塀岩の全景

長門峡を含む中国山地脊梁部には後期白亜紀の阿武層群火砕岩類が広く分布し，生雲カルデラを形成している．重塀岩は山口市阿東蔵目喜麦谷橋東方にある高さ約50 mの巨岩で，阿武川ダムの背水位付近にあり，水面から垂直に切り立っている．長門峡にある奇岩の１つである．この巨岩は阿武層群生雲層の湯ノ瀬溶結凝灰岩部層を貫く石英斑岩岩脈である．ドローンで上空から撮影すると岩脈の板状形態が良くわかり，岩脈は阿武川ダム対岸の道路沿いの崖に連続する．9月に山口大学で開催される本学会巡検の見学ポイントともなっており，Cコース巡検案内書（地質学雑誌125巻7号 p.529-553）のFig. 7の地質図やFig. 18の写真としても掲載されている．

支部コーナー

☆関東支部

報告

地質技術伝承講演会および 2019年度関東支部総会報告

2019年4月13日（土）東京都北区赤羽会館において，地質技術伝承講演会および関東支部功労賞表彰式，2019年度関東支部総会を行いました．総会に先立って行われた地質技術伝承講演会（協力：関東地質調査業協会）では，講師の石油資源開発株式会社 技術本部フェローの横井　悟氏に「石油地質分野におけるunconventionalあるいは非石油的な話」という演題で講演をしていただきました．石油関係の方を講師にお招きしてご講演をいただくのは，今回が初めてでした．石油探査における地下構造の面的な広がりを推定することの難しさなど，具体的な現場調査からのお話で，コンサル関係の地質技術者にとっても大いに参考になったものと思われます．参加者は43名でした．

続いて行われた2018年度関東支部功労賞表彰式では，本間岳史氏，茨城県自然博物館が表彰されました．本間岳史氏は埼玉県立博物館での地質分野の活動に設立時から館長として退職されるまで尽力され，地元の秩父ジオパーク，文化財保護行政分野でも貢献されたことが評価されました．茨城県自然博物館は平成6年にオープンし平成29年には来館者1,000万人を達成した地域の地学リテラシーを担う中核施設で，地質分野の研究，展示，普及に貢献したことが評価されました．

総会（出席者数33＋委任状71で成立）では，2021年大会が早稲田大学で行われる予定あることの紹介から，2018年度活動・決算報告，2019年度活動案・予算が審議され，いずれも拍手で承認されました．今年度は2021年大会の巡検コースの検討など，関東支部担当の学術大会に向けての具体的な準備も含め，会員サービスに努めて参りますので，よろしくお願いいたします．

（支部幹事長　**笠間友博**）

演者の石油資源開発株式会社　横井 悟 氏

関東支部功労賞表彰　本間岳史氏と山崎晴雄関東支部長

関東支部功労章表彰　茨城県自然博物館小池渉氏と山崎晴雄関東支部長

院生コーナー

日本古生物学会第168回例会 夜間小集会「博物館を学ぶ」参加報告

村上 達郎
（佐賀県立宇宙科学館・愛媛大学理工学研究科博士後期課程3年）
黒須弘美
（天草市立御所浦白亜紀資料館）
髙津 翔平
（岐阜県博物館）

夜間小集会「博物館を学ぶ」（若手のための会主催）

2019年1月25日（金）から27日（日）にかけて，神奈川県立生命の星・地球博物館において日本古生物学会第168回例会が開催されました．本学会では，初日のシンポジウム「絶滅生物が生きていた当時の姿を復元するための挑戦と課題～現在は過去を解く鍵～」を皮切りに，2日目と3日目には54件の口頭発表と49件のポスター発表が行われました．また，インカクジラをテーマにした普及講演会やそれに伴うギャラリートーク&バックヤードツアーに加え，サイエンスイラストレーションを扱った化石友の会イベントも開催されました．

中でも今回は，日本古生物学会の若手のための会が主催となった夜間小集会「博物館を学ぶ」が開催され，セッション終了後にも関わらず学会員をはじめ延べ100名を超える方々が参加されました（写真1）．本夜間小集会は，前半の「神奈川県立生命の星・地球博物館バックヤード見学」と後半の「パネルディスカッション」の2部構成となっています．前半は神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員の方々に直接バックヤードを案内いただき，後半には群馬県立自然史博物館や埼玉県立自然の博物館など各博物館から計7名のパネリストをお招きし，博物館の抱える諸問題や学芸員・研究員への道のりや活動内容について，討論いただきました．

ここでは，本夜間小集会について，前半・後半パートに分けてそれぞれ報告いたします．

（**髙津翔平**）

バックヤード見学

バックヤード見学では，神奈川県立生命の星・地球博物館の樽学芸員，松本学芸員，佐藤学芸員が博物館のバックヤードへ先導していただきました．参加者30名は15名ずつに分かれ，1階と2階の収蔵庫を交代で見学し，収蔵庫の特徴や展示の工夫などについて解説を受けました．

樽学芸員には1階収蔵庫の紹介をしていただきました．1階

写真左から，写真1. 神奈川県立生命の星・地球博物館の佐藤学芸員による博物館の解説の様子，写真2. 松本学芸員によるバックヤード解説の様子，写真3. パネルディスカッションの様子

収蔵庫には，大・中・小の収蔵庫があり，そこには化石標本や現生の大型動物資料，昆虫や植物資料が保管されていました．今回は主に，中津層群産のサメ化石コレクションや大磯層産の動物化石，長沼層産の貝類化石コレクションなどの神奈川県産化石標本の紹介やゾウ類コレクションを紹介していただきました．中でも日本産やアメリカ産のゾウ類化石の巨大頭骨や全身骨格がそろっている現生ゾウ類のコレクションは，大型棚に保管されており，見学者一同その光景に圧倒されました．標本の紹介の後には，収蔵庫の構造の説明と質疑応答が行われました．構造上の問題点として，収蔵庫の天井が高く重い標本であっても，上段に置いている標本は，はしごを使用しないと標本の持ち運びができない点や2階収蔵庫の床が網目状になっているため，筆記用具や小さい標本などが1階に落ちる可能性があることなどが挙げられました．標本観察などで本館を訪問した際には，こういった点にも注意して欲しいと教えていただきました．

2階収蔵庫では松本学芸員と佐藤学芸員が，展示の工夫や手法について現生動物の骨格標本を使用して，詳しく解説していただきました（写真2）．まず，アナコンダの骨格標本を使用し，展示するために，どういった格好が来観者を楽しませることができるかということや，アナコンダの抜け殻なども展示に加えることによって，より面白い展示になることを教えていただきました．さらに，ワニの全身を映した写真パネルの上に鱗板を張り付けることで，どの部位の骨かをイメージしやすいように工夫された展示の手法についても解説していただきました．他にも透明骨格標本や剥製などの標本の制作方法にこだわり，身近なものから珍しいものまで，様々な生き物をより身近に感じとってもらう為の工夫についても詳しく解説していただきました．

今回のバックヤード見学では，神奈川県立生命の星・地球博物館の収蔵庫の特徴や問題点，展示の手法や工夫など多くのことを教えていただきました．今回解説していただいたことを踏まえ，収蔵庫の管理や展示の工夫など，今後私たちが博物館の学芸員の一員になった際にどうすれば良いかを考えさせられる良い機会になりました．

（村上達郎）

パネルディスカッション

パネルディスカッションは，当初は西会議室にて開催される予定でしたが，当日は50名以上の参加者がいたため，急遽今回の学会でメイン会場として使用されているシアター室へ場所を移しての開催となりました．西会場では，パネリストとして参加した学芸員や，古生物学会会員である日本各地の博物館の学芸員の方々が作成したパンフレットやグッズ，本等を展示しており，机に乗りきらない程の量となっていました．

実際のパネルディスカッションは，世話人に岐阜県博物館の高津学芸員，パネリストとして瑞浪市化石博物館の安藤学芸員，群馬県立自然史博物館の高桑学芸員，埼玉県立自然の博物館の北川学芸員，城西大学大石化石ギャラリーの宮田学芸員，天草市立御所浦白亜紀資料館の黒須学芸員が参加しました（写真3）．パネリストの所属する博物館はそれぞれ規模や運営形態が異なっており，一口に博物館といっても実際の肩書が異なる場合があることが安藤学芸員から紹介されました．

討論は安藤学芸員が講話を行う形で進められ，トピックの途中にそれぞれのパネリストに，各博物館の現状や標本を教育として活用する例，学芸員の実際，ここ10年で大きく変化したこと等について話がありました．参加者の中には，学生だけでなく，実際に学芸員として各博物館で現在活躍されている方も多く参加されており，参加者側からだけでなく，パネリスト側からの質問が飛ぶシーンも見受けられ，積極的な意見交換が行われました．

また，学芸員に求められるものとして「企画力」や「情報収集能力」，「学芸員資格の取得の有無」等があげられ，こちらについてもパネリストから解説や現状が報告されました．自然史系だけでなく民族系の学芸員も所属する総合博物館では，お互いの企画展やイベントなどへの協力が求められる場合もあるという実例の報告もあり，博物館の実際の姿に触れることが出来ました．「企画力」については，例として安藤学芸員が実際に行った化石の日のミニ展示会や高津学芸員が行った岐阜県博物館への誘導のための恐竜の足跡マークについても紹介があり，参加者が学芸員の「企画力」を目の当たりにしました．

夜間小集会後は，会場に残ったパネリストに個別で質問をする参加者も多くみられ，今後学芸員・研究員を目指す方々が実際の現場の声に触れ，意見交換や討論を行う良い機会となりました．

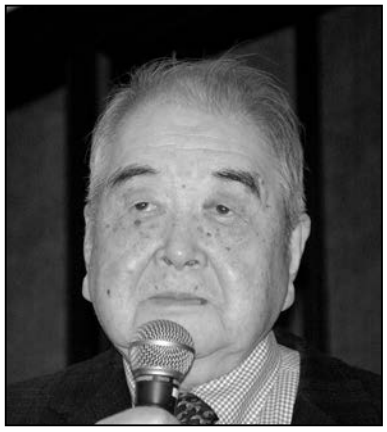
（黒須弘美）

最後になりましたが，本夜間小集会を開催するにあたり，バックヤード見学や会場準備にご助力いただきました日本古生物学会第168回例会開催実行委員会の皆様，夜間小集会パネリストの皆様，そして夜間小集会に参加いただいた参加者の皆様に，この場を借りて御礼申し上げます．

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名で行っています．原稿は5000字以内，図・写真３点以内を目安に，e- mailでいただければ幸いです．

manto.yamada@gmail.com　山田眞嵩（北大）
716o.nonn@gmail.com　大山　望（九州大）
a.sakuma@eps.s.u-tokyo.ac.jp　佐久間杏樹（東京大学）
dkuwano@chiba-u.jp　桑野太輔（千葉大学）

追　悼



名誉会員　武田裕幸さんを偲ぶ

名誉会員・武田裕幸さんは，令和元年5月26日永眠されました（享年92歳）．

本会では昭和39年から評議員，執行委員を16年間，その間に執行委員長と評議員会議長を務め，昭和59年～同62年に副会長として運営に携われました．

武田さんは，大正15年7月札幌でお生まれになり，札幌一中から昭和19年北海道大学の予科理類に入学され，昭和36年の秋まで札幌で生活しておられました．北大予科では勤労動員の連続で，先生からガリ版刷りのプリントが送られ，それで勉強するといった状態でした．昭和22年，理学部地質学鉱物学教室へ進級されました．橋本誠二先生から，「地鉱はいろんなところに旅行できていいところだよ」と言われて地鉱に入られたそうです．

教室では湊正雄先生に師事され，先生の専門である石炭紀・二畳紀の層位・古生物を研究されました．湊先生は努力家でなかなか厳しく，武田さんもその影響を受けて１日5時間の睡眠という習慣が身につき，そのことが後の人生に大いに役に立ったと言っておられました．当時の地質学は「現場から学べ」というフィールド重視の時代でした．武田さんは南部北上山地を，学生時代を含めて14年間で通算16か月間歩かれたそうです．

湊先生のもとでのフィールド重視の調査結果は，武田さんの素晴らしい地質図に現れており，のちに湊先生・舟橋先生一門が共著で出版された古生代研究の『Variscan geo history of northern Japan:THE ABEAN OROGENY』には，その成果が活用されています．また，大学の教職員組合の役員として主に組織活動に従事し，大学内のあらゆる職種の人々との交流がありました．このことが企業や業界などの運営上の，大きな底力となっていたように思われます．

北大では湊正雄先生の助教授をしておられましたが，昭和36年秋，以前から生産活動に近い職業に従事したいと考えておられた武田さんは，当時海上保安庁水路部におられた星野通平さん（東海大学名誉教授）の紹介で，航空測量の国際航業㈱に入社されました．国際航業では当時常務の平岡学さんが中心になって，建設コンサルタント業を始める意向を持っておられました．日本は新たな国土建設にかかろうという時期であり，建設省技監の高野勝さんの，これからの日本には地質調査業も必要だというアドバイスによるもののようです．

そのころ鉱山業界は縮小の時代にありました．武田さんが札幌を離れる際，野村鉱業におられた及川貢さんから「私もぜひ一緒に」と言われていました．同時に及川さん会社の先輩・中山政一さんをスカウトし，新宿南口ガード下の「石の家」で，まだ若い三人が「石の家の誓い」を立てたことが地質部創立の原点となりました．昭和37年こうした地質部の骨格ができ始めたころ，筆者の一人・今村遼平らが新卒社員として入り，地質部の体制ができました．

そのころの地質部は金曜日の夕方には「雑誌会」が開かれ，外国の文献購読など新しい知識を吸収しようという気迫に満ちていました．雑誌会では，顧問の杉山隆二先生や湊先生の講義を受け，東大の高橋裕先生の水の話を聴いたり，高いレベルの教育を受けました．

武田さんは地質調査事業や航空測量の新しい方向性を見据えた有能な経営者でしたが，その前に，やはり有能な教育者でもありました．私たち若い部員はその薫陶を受けて，仕事をしながら学ぶという企業文化が自然に身についたように思います．新宿西口でもよく飲んで，地質部の将来を語り合いました．武田さんは社員に将来の夢をかたり，私たちに希望を持たせてくれました．中山さんは，そこに大いなる知性を付加してくれ，私たち若い部員はそんな雰囲気の中で社会人として成長し，後で考えるとそんな「武田学校」は，他社にない文化であったことを痛感します．

事業の方では，当時，縦貫道関係の仕事や砂防の新たな方向の仕事が多く，それらに武田さんが方向づけられた写真地質学が最大限に応用でき，同業他社にない分野を持つ企業に成長していきました．その過程では，武田さんがいろいろな大学の方々と知遇を得ていたことに助けられました．おかげで私（今村）も多くの先生方とフィールドを歩くことができました．若手技術者には，タイ全土の重力測定の仕事やスラウェシ島の空中磁気探査をカナダの会社に依頼して担当させるといったように，当時の航測会社ではできないようなプロジェクトにも武田さんは積極的に参入して行かれました．農林省出身（後に東海大学教授）の柴崎達雄さんの指導のもと，鎌田烈さんを先頭に水文地質学を事業にしたてて世に問うことを求められたのも，武田さんです．後に平成7年日本地質学会賞を受賞した水収支研究グループの多くのメンバーを育てました．また，昭和39年には音波探査機を導入し，海底地質調査のさきがけとなりました．地理や地質調査コンサルタント・環境情報科学センターの設立にも尽力され，学生の就職とその後の養成に心をつくされました．

昭和63年，国際航業がM&Aという形で乗っ取られる事件があり，当時副社長をしておられた武田さんは辞任に追い込まれました．結局私を含め数名でアジア航測㈱に移ることになりました．武田さんは2年余りアジア航測の発展に貢献されましたが，日本測量協会からの強い要請もあって協会に移られ，専務理事ののちに副会長を歴任して測量業界の地位向上に尽力されました．

そのほか全国測量業団体連合会，海洋調査協会，日本測量調査技術協会の設立などを手掛けられました．武田さんはいつも，「人には適材適所がある．自分は，ナンバー・ツーが性にあっている」と言って，広く日本の建設関連業の充実に努めてこられました．日本測量協会の副会長という第一線を退かれた後も，最後まであとに続く者の良き指導者であり続けられました．

この追悼文は，私たちが2013年2月に作った『武田語録』のなかの，「武田さんの経歴」（武田さんの自筆）に多くを負っています．私たちの社会人になってからの「恩師」武田さんの冥福を，心からお祈りいたします．なお，ご家族は，奥さん（圭子さん），長男・裕さん・長女まどかさんがご健在でおられます．

（今村遼平・大森正一）

広告募集

ニュース誌に広告を掲載しませんか？

ニュース誌の掲載広告を募集しています．学会直接取り扱いになりますので、カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．是非ご利用ください！

	価格(白黒)	版下作成	カラー印刷
表4	60,000	+10,000	+10,000
表2	50,000	+10,000	---
表3	40,000	+10,000	---
本文頁	35,000	+5,000	---

（単位：円）

【お得な割引価格も設定しています！！】

掲載位置・サイズにかかわらず，
4回掲載一括注文：10％割引
6回掲載一括注文：15％割引
※一年度内（4～3月）もしくは一巻内（1～12月号）で一括注文頂いた場合に限ります．

申込・問い合わせ：一般社団法人日本地質学会 事務局
電話　03-5823-1150　FAX03-5823-1156
e-mail: main@geosociety.jp

～卒業記念やイベントなどのグッズにも最適！　　好評発売中～

ご好評いただいております，学会オリジナルフィールドノートは，名入れサービスも承ります（有料）。ビニールコーティングの表紙は，水や摩擦・衝撃にも強く野外調査に最適です。ぜひご活用ください。

サイズ：12×19cm.
中：レインガード紙使用．2mm 方眼.
カバー：ハードカバー，ビニールコティング，金箔押し.
色：ラセットブラウン（小豆色）

定価 600 円（会員頒価 500 円）

学会オリジナルフィールドノート

ご注文・お問い合わせは，学会事務局まで
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156　e-mail: main@geosociety.jp

地質情報展2019やまぐち

めくってみよう！大地の図かん

2019年

9月21日(土)，22日(日)，23日(祝)

入場無料

主催：国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター
一般社団法人 日本地質学会

時間 10:00～17:00
※23日は16:00終了

会場 山口大学 大学会館

体験コーナー 化石のレプリカ作成，関門海峡のなりたち など

特別展示 巨大地質図と砂から学ぶ山口の地質

同時開催 日本地質学会 主催 市民講演会

「防府土砂災害から10年
―災害を経験して次に活かす―」

あの日何が起きたのか。私たちはどうするのか。山口県の土砂災害の特徴と最新の成果を幅広い視点で紹介して、今後10年の防災の役に立てる。必聴の講演会です。

日時：9月22日(日) 13:00～14:30
（無料，事前申込不要）
場所：山口大学 大学会館 大ホール

講師：

判野充昌
（NPO法人山口県防災・砂防ボランティア協会理事長）

宮川千明
（防府市消防団）

河内義文
（株式会社ケイズラブ）

共催：山口大学
後援：山口市，山口県教育委員会，山口市教育委員会，NHK山口放送局，yab山口朝日放送，KRY山口放送，tysテレビ山口，山口ケーブルビジョン，FMYエフエム山口，山口新聞社，中国地質調査業協会，全国地質調査業協会連合会，日本ジオパークネットワーク，秋吉台科学博物館
「地質情報展2019やまぐち」は，JSPS科研費 19HP0008の助成をうけたものです。

【お問い合わせ先】
国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター
TEL：029-861-3540
Email：johoten2019-ml@aist.go.jp

©一般社団法人日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp